

エルレーム
L / M、あるいは LM

— フランソワーズ・サガン「未知の女^{ひと}」のテキスト分析 —

遠 藤 文 彦

はじめに

本稿はフランソワーズ・サガンの短編「未知の女¹」のテキスト分析の試みである。ここで言うテキスト分析とは、一般的な意味での作品分析のことではなく、ロラン・バルトが『S / Z²』において提唱する独自の方法に基づき彼みずから実践してみせた分析のことである。その理論と方法がいかなるものであったのかを予めここで述べることはしない。それを以下でおこなう「未知の女」の具体的なテキスト分析を遂行しつつ示すことが、まさにこの論考の目的に含まれるからである。一方、われわれがサガンの短編小説「未知の女」を分析対象に選んだのは、その作品に、『S / Z』でバルトが分析対象としたバルザックの中編小説『サラジヌ』に通じるところがあるからである。両者の共通点とは、すなわち、いずれにおいても性の問題化、性的アイデンティの動揺、性の二項対立を刻印する斜線（/）崩壊の危機が作品の主題になっていることである。バルトのテキスト分析は、あらゆる作品に適用可能だとしても、あらゆる作品に対してひとしなみに機能するわけではない。それは意味の絶対的可逆性（réversibilité）・多価性（multivalence）を誇る現代的作品（「書きうるテキスト」≪texte scriptible≫）よりも、意味の可逆性・多価性が相対的・限定的であるような古典的作品（「読みうるテキスト」≪texte lisible≫）に対して特に大きな効力——批判的かつ創造的な力——を発揮するのである。一方、意味の可逆性・多価性が限定的とされる古典的テキストの中でも、性の対立に代表される価値論的二項対立を司るコード——「象徴のコード」——それ自体が問題化され主題化されるようなテキストは、意味の可逆性・多価性に秀でており、その限りで能動的価値を帯びているとみなされる。バルトのテキスト分析は対象となる作品の価値を測る尺度であると同時に、分析された作品は当の分析の力が問われる試金石でもある³。われわれが「未

知の女」のテキスト分析によって望んだのは、バルトが『サラジヌ』のテキスト分析によって求めたものと同じく、対象となる作品の価値を明らかにするとともに、当の分析の効力を例証することである。

なお、以下の記述で使用される三文字記号は『S / Z』で用いられているものと同一である。すなわち、HER. は「解釈論的コード」ないし「謎のコード」、SEM. は「意味素のコード」、ACT. は「行為論的コード」、SYM. は「象徴のコード」、REF. は「参照のコード」ないし「文化的知識のコード」である（なお時系列に拘束されるHER. とACT. には番号が付してある）。また、「レクシ」≪lexie≫と称されるのは、これも同書に倣って、多かれ少なかれ恣意的に切り分けられた読みの単位のことである（その個数が69となったのも従ってまったくの恣意——例えば、サガンの享年に一致させた、といった類の恣意——によるものであり、任意に増やすこともできるし減らすこともできる）。これを以下ではL. と表示する。

(1)

L'inconnue
未知の女^{ひと}

* タイトルに謎が込められている。ただしこのタイトルの場合、問いの射程は二重である。そこには「それは誰なのか？」という指示対象の問題と、「それは何者なのか？」という対象の属性の問題が両義的に含まれている。前者は犯人探しの問い（推理小説のテーマ）であり、後者はあら探しの問い（心理小説のテーマ）である。本テキストは基本的に前者に類するもののように振る舞っている（が、それは確実ではない）。（HER. 謎 I : 1 : 提示 : 誰？何者？）。

¹ Françoise Sagan, « L'inconnue », in *Des yeux de soie*, Flammarion, 1975. 邦訳『絹の瞳』朝吹登水子訳、新潮社、1977年。

² Roland Barthes, *S/Z*, éd. du Seuil, 1970. 邦訳『S / Z—バルザック「サラジヌ」の構造分析』沢崎浩平訳、みすず書房、1973年。

³ バルトはテキスト分析の目的を「解釈」（ニーチェ）と呼び、その目的に適った手段・道具を「コンテーション」（イエラムスレウ）のうちに求めている。Voir *S/Z*, pp. 11-16.

** 発音されただけのタイトルでは、問題の人物が女性であるか男性であるか分からない（そのことが、次に述べるように、象徴的に〈中性〉の指標であるというのであれば別だが）。しかし綴り字にはそれが女性であることが示されている。(HER. 謎Ⅰ：2：部分的解答：女性)⁴。
*** 〈女性であること〉はデノテートされているのであって、例えば〈女性的なもの〉としてコノテートされているのではない。テキスト分析では、意味素の中でも特にコノテートされた意味素を意味素として定義しているの、ここでの解釈が意味素のコードの適用を受けているとは言えない。しかし性の同一性（その動揺）が主題となっているこの作品において、〈女性〉は象徴的な価値を付与され〈男性〉に対立している。(SYM. A/Bの対立：B=女性)。対立は書字において示されているのであって、発音においては示されていない。その曖昧さを〈中性〉の指標と取ることができる。その意味では(SYM. 中性：AB、ないし非A非B)。

(2)

Elle prit le virage à toute vitesse et s'arrêta net devant la maison.

彼女は猛スピードでカーブを切り、家の前でぴたりと止った。

* 「彼女」とは誰か？ タイトルの人物か？ 名前が示されないままの人物は謎めいて見える。「彼女」の名は L. 12 で明かされる。(HER. 謎Ⅱ：1：提示：「彼女」とは誰か？)。

** (ACT. 帰宅：1：到着)。

*** 車（特に高性能の車）の所有は〈富裕〉の記号として機能している。(SEM. 富裕)。また、車の運転技能の高さないし荒さは、もっぱら男性に認められる性質として与えられている。(SEM. 男性性、男まさり)。

**** この作品において性は象徴的価値を帯びている。意味素〈男まさり〉は事実としては女性を示すが、象徴的には〈男性〉そのものを意味する。(SYM. A/B：A=男性)。

(3)

Elle klaxonnait toujours en arrivant. Sans savoir pourquoi, d'ailleurs,

彼女は家に着くといつもクラクションを鳴らすのだった。そもそもどうしてそんなことをするのかも分からなかったが、

* (ACT. 帰宅：2：帰宅の告知)。

** ここでの語りは純粋に客観的な記述ではなく、L. 5 で明示される「彼女」の内省に端を発し、L. 7 まで続く自

由間接話法に接続している。(ACT. 内省：1：事実認定)。

*** 彼女の不可解な行動の理由・動機は何か？ どうしてそんなことをするのか彼女自身にも分からない。この行動が彼女の無意識（夫に対する疑念、不信任）に由来し、現に今回出来た事件（不貞）と関係があるということは、L. 8 以下で次第に明らかになる。彼女の振る舞いには、夫がかかわる好ましからざる事態の予感（ないし予知）が含まれているのである。(HER. 謎Ⅲ：1：予感：夫に何があったのか？)。

(4)

mais toujours, en arivant, elle prevenait David, son mari, qu'elle était là.

とにかく家に着くといつも、夫のデイヴィッドに帰宅したことを知らせるのだった。

* David はイギリス人に多い名前として導入されている。したがってそれは「デイヴィッド」と表記されねばならない。(SEM. イギリス性)。もとより「デイヴィッド」という名前に〈イギリス性〉を認知するには、イギリス人がその名を使用し、イギリス人に特に多い名前であることを知っている必要がある。(REF. 人名の地誌学)。

** 古代イスラエルの王ダヴィデは美貌の持ち主で、主君サウルの息子ヨナタンと同性愛関係にあったとされる。この名前に特有の意味素は〈美男〉と〈男色〉であるが、その二つは象徴的価値を帯びており、並存することによって男女の対立を印す斜線を動揺させ、不確実なものとする。(REF. 名前の象徴学：聖書：ダヴィデにまつわる物語)；(SEM. 美男、男色)；(SYM. A/B・AB：A=男性、B=女性)。

(5)

Ce jour-là, elle se demanda comment et pourquoi elle avait contracté cette habitude.

その日、彼女はどのようにして、なぜそんな習慣が身に着いたのか、不思議に思った。

* ある事象の不可解さの自覚はその事象の起源に関する疑問を生じさせる。(ACT. 内省：2：自問—その内容は実質上 L. 3 に始まり L. 7 に続く)。

** 習慣への疑問は日常に破れ目を生じさせる。それは〈事件〉が出来する前触れであり、〈非日常的なもの〉=〈小説的なもの〉の到来 (*aventure*) を予告する。(SEM. 事件発生の予感)。

⁴ 大衆歌謡などにおいて「女」と書いて「ひと」と読ませる慣習にない（「函館の女」「加賀の女」「博多の女」「長崎の女」「石巻の女」…）、本稿では戯れに「未知の女」とした。

(6)

Après tout, il y avait dix ans maintenant qu'ils étaient mariés, dix ans qu'ils habitaient ce ravissant chalet près de Reading, et il ne semblait pas indispensable qu'elle annonçât toujours de la sorte son arrivée

結局のところ、結婚してもう十年、レディング近郊のこの瀟洒な別荘に住んで十年になるのだから、こんな風にしていちいち帰ってきたことを知らせる必要など必ずしもあるとは思えない、

* 「結婚して十年にもなる夫婦が毎回帰宅を相手に告げるのは無用」といったある種の常識への参照がなされている。(REF. 夫婦の生態学)。「結婚十年」は、社会的安定、夫婦の信頼関係、家庭の幸福を意味すると同時に、男女関係の自動化=倦怠期をも意味するという点で両義的であり、象徴的に曖昧な記号である。(SEM. 安定安全/危機危険); (SYM. A・B: 対立項の共存、両義性)。
** (REF. イギリスの地誌: レディング⁵)。

*** レディング近郊のシャレー=山小屋風の別荘・邸宅。(SEM. 富裕、社会階級)。

(7)

au père de ses deux enfants, à son époux, à son protecteur éventuel.

二人のわが子の父であり、わが夫であり、場合によっては自分を守ってくれる人に。

* デイヴィッドが良き父にして良き夫であり頼れる家庭人であるということ、要するに〈善き男性〉であるということは、意味素のレベルでは、デイヴィッドが〈善良であること〉を三つの側面から意味している。(SEM. 善良さ)。この意味素は〈邪悪さ〉と対立することにおいて象徴的テーマ系を形成する。(SYM. A/B: A=善)。
** 同じことは、別の象徴的レベルで、彼が〈男性であること〉を同語反復的に三度繰り返しているにすぎない(「彼は男であり、男であり、男である」)。むしろそれは、自由間接話法が示す通り、この時点での彼女の意識においてのことである。(SYM. A/B: A=男性)。

(8)

- Où est-il passé ? dit-elle dans le silence qui suivit, 「どこへ消えちゃったのかしら？」と、それに続く沈黙の中で彼女は言った。

* (ACT. 帰宅: 3: 応答なし=夫の不在)。

** 応答があつて然るべきときに応答がないのは異常事態である。夫に何があつたのか? この問いがこの物語における主要な謎の中身である。(HER. 謎Ⅲ: 2: 謎の定式化)。

*** (ACT. 独白: 自問)。

(9)

et elle descendit de la voiture et marcha de son son grand pas de golfeuse vers la maison,

それから車を降り、いかにもゴルフをやる人らしく大股で歩き、家の方に向かって行った、

* (ACT. 帰宅: 4: 家に向かう)。

** ゴルフをたしなむ人の社会的階層と同時に大股で歩く女性の男性的性格を読み取ることができる。(SEM. 富裕; 男まさり); (SYM. A/B: A=男性)

(10)

suivie de la fidèle Linda.

後に忠実なリンドを従えて。

* 「リンド」はフランス人に少なくイギリス人に多い名前であり、語末の「a」は〈女性性〉を表す(スペイン語・ポルトガル語で「linda」は「綺麗な、可愛い」は「lindo」の女性形である)。(SEM. イギリス性、女性性)。
** 「忠実な」« fidèle »は動物(「忠実な」犬)、友人(「忠実な」友)、伴侶(「貞節な」妻)について使われる語であるが、額面上ここではリンドについて〈男性的な〉「彼女」(=ミリスセント)との対比で用いられており、記述全体は〈能動性〉/〈受動性〉、あるいは〈男性性〉/〈女性性〉という二人の女性の性格上の対比に依って分節されている。しかし、差し当たり友情のレベルで作動している意味論的対比は、愛情のレベルに引き上げられ〈男性〉/〈女性〉の価値論的対立へと格上げされて、作品の主題論的パラダイムを構成する。(SYM. A/B: B=女性)。

(11)

Linda Forthman n'avait pas eu de chance dans la vie. À trente deux ans, après un divorce malheureux, elle était restée seule - courtisée souvent, mais seule -

リンド・フォースマンのこれまでの人生はあまり恵まれたものでなかった。不幸な離婚の後、三十二歳にしてずっと一人を通してきた——よく男に言い寄られることはあつたがずっと一人だった——、

⁵ 参照のコードの適用あるいは拘束を受けて、Readingは固有名として解読されるが、ここでは、その適用・拘束を逃れてこれを普通名詞として解読する一種の詩的許容が可能である。固有名は解読すべき暗号であり、そこに解明すべき謎が隠されていることもありうるのだ。じつこの種の固有名の創造的読みは本テキストに実際に組み込まれているように思われ、他の作品ではそれが主題にさえなっている。特にL. 17 およびその注を参照。

* リンダの姓フォースマンはイギリス人の姓として〈イギリス性〉を意味するが、フォースマン Forthman はドイツ語姓フォートマン Fortmann の英語化されたつづりで、fort は「不在」、mann は「男」を意味する。(SYM. ㊦/B: 男の不在、パラダイムの失効、去勢)。

** 三十二歳は、まだ老いてはいないがもはや若くない年齢であり、「人生の曲がり角」、老いと若さの〈中間〉として位置づけられている⁶。(SYM. 中間: 非A非B)

(12)

et il fallait toute la gentillesse et l'entrain de Millicent pour supporter, par exemple, ce dimanche entier au golf, avec elle.

だから例えば、ミリセントが本当に親切で快活なひとであればこそ、この日曜日、彼女と二人して、ゴルフ場で丸一日を過ごすことができたのだ。

* 「彼女」(L. 2)の名は「ミリセント」である。(HER. 謎Ⅱ: 2: 解明)。

** 名前の謎はあっけなく解明される。しかし「ミリセント」はフランス語の「メリザンド」であり(REF. 名前の系譜)、『ペレアスとメリザンド』に登場する「メリザンド」は素性が知れず夫のゴローを裏切りペレアスと密通する女である。(REF. 文学: 不義)。さらに「メリザンド」は半身が人間、半身が蛇である謎の怪物「メリュージュ」の別称でもある。(REF. 伝承・説話: 怪物)。このように、固有名の内に蓄積した文化的知識、いわば名前の象徴学に準拠してみるなら、名前に関する謎(「彼女」とは誰か?)が解明された先から、ただちに名前を巡るより奥深い謎(ミリセントは何者か?)が再導入されていると言える。実のところミリセントは登場人物の中でも最も謎めいていない人物と感じられるが、それは語りの効果として、もっぱらこの物語がミリセントの主観を通して語られているからであって、実は彼女こそが物語中で最も謎を秘めた人物であった、ということもありえないことではない。いずれにしても、これが謎だとして、この謎は物語を通して語りによって明示されることはもとより、暗示されることもない。それは再読する読者が暗号として読み解くことで成立する対象である。(REF. 名前の秘教的・神秘主義的象徴学)。

(13)

Sans être plaintive, Linda était furieusement apathique Elle regardait les hommes (les célibataires, bien entendu),

et ils lui rendaient son regard et il semblait bien que cela s'arrêtait là. Pour Millicent, qui était une femme pleine de vitalité, de charme et de taches de rousseur, le personnage de Linda était une énigme.

愚痴っぽいというわけではなかったが、それにしてもリンダはひどく無気力だった。男(もちろん独身の男だ)に視線を送ることはあったし、男が彼女に視線を返してよこすこともあったが、それ以上の進展はありそうにもなかった。活力に満ち、魅力に溢れ、そばかすだらけのミリセントにとって、リンダのような人物は一つの謎であった。

* 「ミリセント」に似て、「リンダ」という名も、スペイン語・ポルトガル語としては「美女」だが、語源的には古ゲルマン語で「蛇」であり、素性の知れない人物を意味する。(REF. 語源、名前の象徴学)。

** リンダの性格は、ミリセントの性格との対比において強制的に描かれている。それは〈女性性〉／〈男性性〉、あるいは〈受動性〉／〈能動性〉の意味論的対立に基づいているように見えるが、子細にみると、リンダの〈女性性〉ないし〈受動性〉と見えるものは、実は象徴的な〈女性〉の喪失、要するに去勢の効果としての〈中性〉に他ならないということが分かる。実のところ、彼女は受動的でさえなく、根本的に態を失った「無気力な」« apathique » 存在であり、その無気力ぶりは〈男性〉へのパトスの根源的喪失に由来するのである。ミリセントにとってリンダの人柄は「謎」であるが、その「謎」が、彼女が過去に蒙ったトラウマに関係があるということが暗示されるのは L. 50においてである。(HER. 謎Ⅳ: 1: 提示: リンダは何者か?)

*** L. 11に始まるリンダに関する記述は、ここからミリセントの省察に基づくものであることが明示され始め、L. 14を契機にデイヴィッドへの言及が主となり、L. 18まで続く。(ACT. 内省: 3: リンダをめぐる疑問)。

(14)

Parfois avec son cynisme habituel, David avait tenté de lui expliquer les choses : « Elle attend un mâle, disait-il, elle est comme toutes les bonnes femmes, elle attend un mâle sur qui elle puisse mettre le grappin. »

ときにデイヴィッドは、そんな彼女のことをいつもの人を馬鹿にしたような言い方で解説しようとした。「あの女はオスがのこのことやって来るのを待ってるんだよ、その辺の女たちはみんなそうだが、オスを捕まえようとして待ち構えているメスみたいなものさ。」

⁶ 『絹の瞳』所収 « L'étang de solitude » 「孤独の池」で、主人公のブリュダンスは三十歳ちょうどであり、この数字には象徴的に老いと若さの〈中間〉という意味が込められている。一方、リンダの年齢の端数が何かを意味しているとすれば、その意味はもはや象徴的なものではなく、機能的なものである。すなわち、端数の表記は現実と物語の連続性ないし隣接性を意味し、後者に「真実らしさ」を保証する役割を担っているのである(ちなみに『ブラームスはお好き』の女主人公ポールは三十九歳)。Cf. Roland Barthes, « L'effet de réel », *Communications*, n° 11, 1968

* 「リンダは何者か？」という謎 (謎Ⅳ) の解明の試みとして、デイヴィッドの見解が援用される。(HER. 謎Ⅳ：2：解明の試み：1：否定的解釈)

** デイヴィッドはなぜミリセントの本性を知っているかのように振る舞うのか？この振る舞いによって、暗に当のデイヴィッドの本性を巡る謎が導入される。(HER. 謎Ⅴ：1：暗示：デイヴィッドは何者か？)。謎Ⅲ (デイヴィッドに何が合ったか？) と謎Ⅴ (デイヴィッドは何者か？) は密接に結びついているが、前者は行為=筋 (action) に関わり、後者は人物=人格 (personne) に関わる謎である。

*** デイヴィッドは口が悪い。(SEM. 皮肉屋、冷笑家)。この意味素は L.7 で示されたデイヴィッドの人格に係る意味素〈善人〉と象徴的に矛盾・対立しており (SYM. A/B：B=邪悪)、結果的に彼の性格の二重性を示唆している。(SEM. 二重人格、偽善者)；(SYM. AB=二重性)；(HER. 謎Ⅴ：3：答えの暗示)。

(15)

Mais ce n'était pas vrai et c'était, en fait, grossier. Aux yeux de Millicent, Linda attendait tout bêtement que quelqu'un l'aime, elle et sa nonchalance, et la prenne en charge.

でも、それはちがう、というか、ひどい言い方だ。ミリセントの見たところ、リンダは誰か自分のことを、自分の投げやりな性格と一緒に愛し、受け入れてくれる人がやって来るのをただひたすら待っているだけなんだ。

* 「リンダは何者か？」という謎の解明の試みとして、デイヴィッドの見解へのミリセントによる反論が提示される。(HER. 謎Ⅳ：3：解明の試み：2：肯定的見解)。

** デイヴィッドが〈皮肉屋〉、〈冷笑家〉、〈偽善者〉として示されるのに対し、ミリセントは〈素朴〉で、〈好意的〉な、〈ロマンチスト〉として示される。両系列の意味素は〈透明〉と〈不透明〉、〈明〉と〈暗〉、〈白〉と〈黒〉の象徴的対立に基づいて分節されている。(SYM. 対立：白/黒)。

*** リンダの愛の要求には母による全面的受容を求める幼児の要求に通じるところがある。ここでリンダをめぐる意味素 (〈女性性〉、〈受動性〉) に〈幼児性〉が付け加わる。(SEM. 幼児)。

(16)

D'ailleurs, à y réfléchir, David était très méprisant et très acerbe au sujet de Linda,

大体、よく考えてみると、デイヴィッドはリンダの話になる

と、ひどく侮辱的でひどく毒のある言い方をするようになるのだった。

* ミリセントの省察の展開に従って、デイヴィッドの本性が少しずつ明かされてゆく。(HER. 謎Ⅴ：3：漸進的解明)

(17)

et de la plupart de leurs amis d'ailleurs. Il faudrait qu'elle lui en parle. Il ne voulait pas se rendre compte, par exemple, de la bonté de ce gros benêt de Frank Harris, lourdaud, bien sûr, mais si généreux, si profondément gentil.

そもそも友人たちの話になると、彼は大抵そうなるのだ。一度注意してやらないといけない。たとえば、のろまで太っちゃあのあのフランク・ハリスのことなんかでも、たしかに間が抜けたところはあるけれど、とつても心が広くて、本当に親切な人なのに、そんな彼のいいところを分かつろうとしないんだ。

* デイヴィッドがリンダを嫌っているのは、彼の女性への相対的無関心 (同性愛嗜好) にも起因する。しかし彼の〈女性嫌い〉 (misogynie) は彼の〈人間嫌い〉によって中和されるように見える。しかるに〈人間嫌い〉 (misantropie) は〈男嫌い〉と解釈することもできる。ただし彼の〈男嫌い〉の対象は「友人たち」の「大部分」に限られるのであり、そこに特別なあるいは特殊な友人 (愛人) は含まれていない。例えば、彼に攻撃されるフランク・ハリスはことさらに愚鈍な男、とりわけ美的魅力が欠如した男性として描かれている。以上はすべてデイヴィッドの同性愛の指標であり、それと矛盾はしないが、ただしその証拠ではなく、デイヴィッドの真実に達するまで推論が深められることはない。(SEM. 女嫌い、人間嫌い=男嫌い、同性愛)；(HER. 謎Ⅴ：4：漸進的解明)

** デイヴィッド (皮肉屋) / ミリセント (素朴)。(SYM. 黒/白)。

*** (REF. 辞書 (固有名の普通名詞としての意味⁷)；人名の地誌学)；(SEM. フランク→率直さ；ハリス→イギリス性)。

(18)

David avait coutume d'en dire : « C'est un type à femme, sans femmes... », et là il se mettait à rire chaque fois de sa propre plaisanterie comme si elle avait été l'une des trouvailles inimitables de Bernard Shaw ou d'Oscar Wilde. デイヴィッドはあの人のことをいつも「あいつはもてないブ

⁷ 『絹の瞳』所収の「孤独の池」« L'étang de la solitude » は、普通名詞 prudence を固有名として持つ女性の自分自身の名前への違和感をテーマとする物語である。

レイボーイなのさ..」などと言って、そのたびに、それがバーナード・ショーかオスカー・ワイルドの名言かなにかのように、自分の洒落に自分で受けて笑い出すのだった。

* デイヴィッドの機知に富んだ言葉は有名な二人の作家の名言に比せられる。(REF. 文学；機知に富む作家)。

** しかるに、バーナード・ショーもオスカー・ワイルドもそのいわゆる語録で有名な作家だが、後者はそれに加えて同性愛者としても際立って名高い人物である。オスカー・ワイルドへの参照はデイヴィッドの真実への暗示でもある。(HER. 謎Ⅴ：5：暗号化された答え)

(19)

Elle poussa la porte, entra dans le salon et s'arrêta un instant, stupéfaite, sur le seuil.

彼女はドアを開け、サロンに入ろうとして、一瞬敷居のところで啞然として足を止めた。

* (ACT. 帰宅：5：戸を開ける、入り口で立ち止まる)

** 屋内には謎の答えがある。それを目撃しながら敷居のところで立ち止まることは謎の解明の中断を意味する。(HER. 謎Ⅲ：3：答えの予告と宙吊り＝サスペンス)

*** 両項にどのような価値が付与されるにせよ、内部と外部は象徴的軸に沿って構造化されている。内と外は正負の価値いずれも帯びる可能性があり、いつでも反転しうるものである(例えば L. 32, 33参照)。ここで内部は非日常＝事件の場所を、外部は非事件＝日常の空間を意味する。(SYM. 非A非B：A＝外(日常)、B＝内(事件)：中間)。

(20)

Il y avait des mégots et des bouteilles ouvertes partout et des deux robes de chambre en vrac, dans un coin : la sienne et celle de David.

タバコの吸殻と栓の開いたボトルがあちこちに散乱し、部屋の片隅には二着のガウン——私のガウンにデイヴィッドのガウンが脱ぎ捨てられていた。

* (SEM. 乱痴気騒ぎ、派手なパーティ)。

** タバコの吸殻と栓の開いたボトルは必ずしも性的暗示を含まないが、脱ぎ捨てられた二着の部屋着は(情事)を意味すると同時に、謎Ⅲへの答えを含意する記号である。(SEM. 不貞)；(HER. 謎Ⅲ：4：答え：不貞)。

(21)

Pendant un bref instant de panique, elle eut envie de faire demi-tour, de repartir et de n'avoir rien vu. Elle s'en voulut de n'avoir pas téléphoné avant, qu'elle rentrerait plutôt que prévu : non pas le lundi matin, mais le dimanche soir.

一瞬パニックに陥った彼女は、踵を返してこの場を立ち去り、何も見なかったことにしたいと思った。どうして帰る前に電話をしなかったのだろう、予定より早く、月曜の朝じゃなくて日曜の夕方に帰って、伝えておけばよかった。

* ミリセントは心理的動揺から果敢に事実に向き合うことをためらう。彼女の躊躇と逡巡は、物語に一定の時間を確保するための語りのエコノミーに従属している。(HER. 謎Ⅲ：5：謎解きの回避、解答の延期：サスペンス)。

** ミリセントとリンダは日曜の夜をよそで共に過ごし、月曜に帰ってくる予定であったが、L. 33, 42で明示される理由によって一日早く帰宅した。(ACT. 帰宅：6：繰り上げられた予定日)。

*** (ACT. 内省：4：後悔する)。

(22)

Seulement Linda était déjà derrière elle, les yeux ronds dans son visage blanc, l'air oppressé, et il lui fallait trouver une parade pour ce quelque chose d'irréparable qui s'était sans doute passé chez elle.

けれども、リンダがもう後ろに来ていて、顔面は蒼白、目を丸くして、苦しそうな表情で立っていた。自分の家できつとなにか取り返しのないことが起きたに違いないのだが、さあ、それをごまかす理由をなにか見つけないといけない。

* 事件のもう一人の目撃者であるリンダは、ミリセントにとって、事実に向き合うことの回避を許さない存在として機能する。(HER. 謎Ⅲ：6：サスペンスの解除：謎解きの続行)。それにもかかわらず、なおもミリセントは事実と誠実に向き合うことを自己欺瞞的に拒もうとする。(HER. 謎Ⅲ：7：謎解きの回避：サスペンスの維持)。

** 直観的に察知された事件の内容——情事——が遠回しに言い表される。(HER. 謎Ⅲ：8：真相への婉曲な言及)。

*** この一文は L. 23の自由間接話法で伝えられる内省の導入を成す。(ACT. 内省：5：自問する)。

(23)

Enfin, chez elle...? chez eux... ? Car depuis dix ans, elle disait « notre maison » et David disait « la maison ». Depuis dix ans, elle parlait de plantes vertes, de gardénias, de vérandas, de jardins, et depuis dix ans David ne répondait rien.

だけど、自分の家と言えるのかしら？自分たちの家と..？実際、十年前から彼女は「私たちの家」と言ってきたけれど、デイヴィッドはただ「家」と言うばかりだった。十年間、彼女はグリーンプラントや、クチナシや、ベランダや、庭の話をしてきたが、十年間、デイヴィッドは何も答えてくれなかった。

* 省察が展開するにつれ、デイヴィッドをめぐる謎が深まる。(HER. 謎Ⅴ：6：謎の深化)。

** ミリセントの趣味はガーデニングである。それは〈外向性〉・〈自然性〉を意味し、L. 32で明かされるデイヴィッドの趣味（風変わりな内装——*インテリア*——への嗜好）が意味する〈内向性〉・〈人為性〉と対照をなす。(SYM. A/B：A=外、自然、B=内、人為)。

*** 表面的に良好な夫婦関係においても、しばしば深層において性格の不一致、コミュニケーションのずれが見られる。(REF. 夫婦の生態学)。

(24)

- Mais enfin, dit Linda, et sa voix haut perchée fit tressaillir Millicent, mais enfin que s'est-il passé ici ? David donne des parties en ton absence ?

「いったい全体」とリンダが言う。その甲高い声にミリセントはびくっとした。「いったい全体ここで何があったのかしら？デイヴィッドがあなたのいないときにパーティするなんてことあるの？」

* (ACT. 対話：1：問いかける)。

** (HER. 謎Ⅲ：9：謎解き：部分的解：パーティ)。

(25)

Elle riait. Elle semblait, elle, ça assez gaiement. Et, effectivement, il était très possible que David, parti pour Liverpool l'avant-veille, soit rentré en catastrophe, ait passé la nuit là et soit reparti dîner au Club, tout près.

彼女は笑っていた。彼女の方は事態をかなり楽観的にとらえているように見えた。実際、デイヴィッドは、おとといリヴァプールに出かけたあと、急遽戻ってきて、一夜をここで過ごし、すぐ近くのクラブにまた出かけていったという可能性は大いにある。

* (ACT. 笑いⅠ：1：笑う)；(ACT. 内省：6：推論するⅠ (L. 27まで続く))。

** 楽観的解釈により謎そのものが存在しない可能性が想起される。(HER. 謎Ⅲ：10：楽観的推理；謎の否認)

*** リヴァプールは工業と交易の都市、〈ビジネス〉の町である。(REF. イギリスの地理：リヴァプール)；(SEM. 仕事、ビジネス)。

**** イギリスの「クラブ」は会員制で、専ら上流階級の男子を対象とする。(REF. イギリスの習俗)；(SEM. 富裕；男性性)；(SYM. A/B：A=男性)

(26)

Seulement il y avait ces deux robes de chambre, ces deux oripeaux funèbres, ces deux étandards, presque, de l'adultère, et elle s'étonna de son propre étonnement.

ただ問題なのはこの二着のガウンだ——このいまわしい二つの派手な衣装、まるで不義の旗印でもあるかのような二つの品——、なのに彼女はそんなことに驚いている自分に驚いた。

* 二着の部屋着は〈不義〉の明らかな記号である（ただし確実な証拠ではない)。(HER. 謎Ⅲ：11：推理：可能でありかつ妥当な解釈)。

** (ACT. 驚き：1：驚く)。それまで疑問を感じていなかったことに驚きを感じることは、これから生じる自己の二重化・分裂の契機である。

(27)

Car enfin David était très bel homme. Il avait les yeux clairs, les cheveux noirs, des traits fins et beaucoup d'humour. Et elle n'avait jamais pensé, jamais eu le moindre pressentiment et, a fortiori, la moindre preuve qu'il ait eu envie d'une autre femme qu'elle. Cela, confusément mais assurément, elle le savait. Elle en était absolument persuadée ; David n'avait jamais regardé une autre femme qu'elle.

というのもデイヴィッドはとびきりの美男子なのだから。彼は明るい目に黒い髪をし、整った目鼻立ちで、ユーモアのセンスは抜群だった。それでも彼女は、彼が自分以外の女を欲したなどと、いままで一度も考えたことはなく、これっぽっちもそんな予感を抱いたこともなく、ましてや、それを示すどんな些細な証拠もつかんだことがなかった。彼女は漠然とだが間違いなく知っていた。彼女には百パーセントの確信があったのだ、デイヴィッドはけっして自分以外の女に目を向けたことなどないのだ、と。

* ここに描かれたデイヴィッドの肖像（明るい目、黒い髪、端正な目鼻立ち、ユーモアのセンス）は「いい男」の美的・知的条件としてコード化された規範に依拠している。(REF. 西洋における好男子の類型)。

** ミリセントはデイヴィッドの同性愛的嗜好をそれと意識できないまま直観している。この直観は正しいが、謎の解明（デイヴィッドの不義を結論とする推論）を頓挫させ、誤った解釈（デイヴィッドの不義を否定する推論）に導く。(HER. 謎Ⅴ：7：推論：それと意識されない正解)。

(28)

Elle se secoua, traversa la pièce, prit les deux robes de chambre blasphématoires dans leur coin et les jeta dans la cuisine. Très vite mais pas assez vite pour ne pas voir deux tasses sur la table, un peu de beurre égaré sur une soucoupe. Elle referma la porte précipitamment comme si elle eût assisté à un viol ;

彼女は気を取り直して、部屋を横切り、けがらわしいその二つのガウンが脱ぎ捨ててある片隅からそれらを拾い上げ、キッチンの中へ素早く放り投げた。素早くとはいえ、テーブルの上にカップが二つ転がっており、受け皿の上にバターが少しついているのが目に入らずにはいなかった。彼女はまるで強姦の現場でも見てしまったかのように慌ててドアを閉めた。

* (ACT. 後かたづけ— L. 29まで)。

** 二つのティーカップは二着の部屋着と同じくデイヴィッドの不義を帰納的に導く記号である。ただし、そのことは専ら「2」という双数に由来している。部屋着は性行為のメトニミーとして機能するが、ティーカップはどうだろうか。また、受け皿の上に残された少々のバターは何を意味しているだろうか。むしろ何も意味していないことが「現実効果」(R・バルト)を生み出していると考えられるのは常であるのだが、それとは別に、ここでのティーカップ(きっと飲み残しのあるカップ)やバターのついた受け皿は、飲食の残骸であり、飲食欲は同じ生理的欲求であるから、性欲とその十二分な満足の代理表象とみなすことができる。(HER. 謎Ⅲ：12：可能でありかつ妥当な解釈：不義)。

*** 激しい性行為の比喩としての「強姦」のイメージは L. 65で反復される。(SEM. 事態の暴力性)。

(29)

et secouant les cendriers, rangeant les bouteilles, plaisantant, elle entreprit de tirer Linda de sa curiosité première et de la faire asseoir.

- C'est idiot, dit-elle, je me demande si la femme du ménage est venue ranger le week-end dernier. Assieds-toi, ma chérie. Je vais te faire une tasse de thé, si tu veux.

それから、灰皿を空けたり、ボトルを片づけたり、冗談を言ったりして、リンダの初期の好奇心をそらし、彼女を座らせようとした。

「いやだわ、と彼女は言った、家政婦が先週末お掃除に来なかったのかしら。座ってちょうだい。お茶でもいれましょうか。」

* (ACT. 座る：1：促す)；(ACT. 応接：1：提案する)；(ACT. 対話：2：語りかける)。

** ミリセントは、リンダの存在を口実に、状況からして理論的に可能だが事実上確率の低い解釈(自分でも信じていない解釈)を自らに提示し、事実に向き合うことを自己欺瞞的に回避している。(HER. 謎Ⅲ：13：真相究明の中断、延期：サスペンス)。

*** 舞台設定上コーヒーではなくお茶でなくてはならない。(SEM. イギリス性)。

(30)

Linda s'assit, l'air déprimé, la main sur les genoux et le sac au bout des doigts.

リンダは気が減った様子で、片方の手は膝の上に置き、バックは指先に掛けて持ったまま腰を下ろした。

* (ACT. 座る：2：座る)。

** 右手と左手の非対称、握られても置かれてもいないバックは、不安定な宙吊り状態を指し示している。リンダはとりあえず腰を下ろしたものの、L. 48の通り、いまだ腰を据えたわけではない。(SEM. 不安)。

*** リンダはなぜ減った様子をしているのか？ L. 31で示唆されているように疲れているからではなく、この真相を知っているからである。(HER. 謎Ⅳ：4：指標：リンダは何者か?)

(31)

- Au lieu de ton thé, dit-elle, j'aimerais mieux quelque chose d'un peu plus fort. Ce dernier parcours de golf m'a épuisé...

Alors, Millicent revint dans la cuisine, évita de regarder les deux tasses, attrapa quelques cubes de glace, une bouteille de brandy, et revint porter le tout à Linda.

「お茶より、と彼女は言った、もうちょっと強いものが欲しいわ。あの最後のコースを回ったらくたびれちゃったの...」そこでミリセントはキッチンに戻り、二つのカップを見ないようにして、氷とブランデーのボトルをつかみ取ると、それをリンダのもとに運んだ。

* (ACT. 対話：3：応答する)；(ACT. 応接：2：要望する；3：要望に応える)。

** イギリス人はコーヒーでなく紅茶を飲み、ここで問題となる酒類を「コニャック」等ではなく「ブランデー」と呼ぶ。(REF. イギリスの習俗)；(SEM. イギリス性)。

*** 茶と酒は文化的効用・象徴的機能において対照的である。この場面では、前者(キッチンに残されたモーニングティー)は冷めた状態を指向し、夜の興奮からの回復をもたらす。後者は熱い状態を指向し、昼の抑鬱状態の改善をもたらす。(SYM. A/B：A=冷、B=熱)。

(32)

Elles étaient assises face à face dans le salon, ce ravissant salon meublé en bambou et en jersey mélangé, chiné, que David avait ramené d'on ne sait où. La pièce avait repris un aspect - sinon humain - du moins bourgeois anglais,

ふたりはサロンで、デイヴィッドがどこからか持ち帰った竹や斑模様の混紡ジャージーで装飾されたこの素敵なサロンで向かい合って座っていた。部屋は人間的とまではいかないが、

少なくともイギリスのブルジョワ家庭にふさわしい様相を取り戻していた。

* 「竹」や「斑模様の混紡ジャージー」は風変わりな代物である。(SEM. 奇矯さ)。

** それらの品は、デイヴィッドが外から持ち込んだものであり、自然らしさを欠き、健全な趣味に違う。(SYM. A/B: A=内(自然らしさ、健全)、B=外(不自然、不健全))。

*** 起源の不明な調度品は得体の知れないデイヴィッドの隠喩である。(HER: 謎V: 8: 指標: デイヴィッドは何者か?)。そんなサロンを「素敵」と形容しているのは、語り手の皮肉なのか、自由間接話法で伝えられたミリセントの素朴さなのか、声の起源は判然としない。

*** (REF. 習俗: イギリスのブルジョワ家庭)。

(33)

et par la porte-fenêtre on voyait le vent incliner les ormes, ce même vent qui les avait fait quitter le terrain de golf une heure auparavant.

フランス窓越の向こうに、風に楡の木がなびいているのが見えた。その風のために、二人は一時間前にゴルフ場を後にしたのだった。

* 屋内から屋外へのパノラミックによる視線の移動は、内/外の象徴的対立に基づいている。ここでは内部が〈安全〉の肯定的価値を、外部が〈脅威〉の否定的価値を帯びている。(SYM. A/B: A=内(安全)、B=外(脅威))。

** (ACT. 帰宅: 7: 予定を繰り上げて帰宅した理由)。

(34)

- David est à Liverpool, dit Millicent, et elle se rendit compte que sa voix était péremptoire comme si la pauvre Linda avait été susceptible de soutenir le contraire.

- Mais oui, dit Linda obligeamment, je le sais, tu me l'avait dit.

Là-dessus, elles regardèrent ensemble par la fenêtre, puis leurs chaussures, puis leurs yeux.

「デイヴィッドはいまリヴァプールにいるのよ」とミリセントは言ったが、われながらその声の響きが、まるでリンダが反対のことを言い出しかねないともいうかのように断固たるものであることに気がついた。

「もちろんよ、と有難いことにリンダは言った、分かっているわ、そう言っていたもの。」

そこで、ふたりは窓の外に目をやり、それから自分たちの靴を、それからお互いの目を見た。

* (ACT. 対話: 4: 断言する; 5: 肯定する)。

** (HER. 謎Ⅲ: 14: 推理: 既定事実の再提示: 出張)。

*** 視線を遠くに投げ、次いで足元に落とし、最後に互いの目を見つめ合う。視線の動きは思考の活動を意味している。(ACT. 視る: 1: 見回す)。

(35)

Quelque chose commençait à gagner du terrain dans l'esprit de Millicent. C'était une sorte de loup, de renard, en tout cas une bête fauve et une bête qui lui faisait mal. Et la douleur s'accroissait.

何ものかがミリセントの頭の中で勢力を広げ始めていた。オオカミかキツネのようなもの、いずれ獐猛なケダモノ、彼女を苦しませるケダモノのような何かだ。そしてその苦痛は段々とひどくなっていった。

* ここでの比喩の展開は伝統的「動物寓意譚」(Bestiaire)に基づいている。(REF. 動物寓意譚)。

** キツネやオオカミなどの獐猛なケダモノへの言及は、言及している当のミリセントとリンダがヒツジやヤギのように柔和な草食系動物であることを含意しているが、それはさらに〈男性〉と〈女性〉の象徴的対立に送り返されるだろう。(SYM. A/B: A=獐猛、B=柔和)。

(36)

Elle avala un grand coup de brandy pour se calmer, et revint une fois de plus au regard de Linda.

彼女は頭を冷やすためにブランデーをぐいと飲み、今一度リンダの目を見た。

* (ACT. 応接: 4: 飲み物を飲む); (ACT. 視る: 2: 正視する)。むろんこれらの行為は——もとよりいかなる描かれた行為もそうだが——振る舞いの規範(コード)に基づいており、記号として行為者の心理や性格や意思を意味している(ここではL. 62同様「覚悟を決める」意思を表す)。(REF: 振る舞いの記号学)。

(37)

« Bien, se dit-elle, en tout cas si c'est ce que je pense, si c'est ce que n'importe quelle personne logique pense ou pourrait penser, ce n'est pas Linda.

「そうだ、と彼女は思った、とにかく、私が考えている通りだとしても、私だけじゃなくて論理的に考える人なら誰でも考える、あるいは考える通りだとしても、相手はリンダじゃないわ。」

* (ACT. 内省: 7: 推理2)。直接話法で始まる内的独白は、L. 39で自由間接話法に引き継がれ、L. 40まで続く。

** 謎の答えとして既に示されつつあるデイヴィッドの不義があらためて婉曲に示される。(HER. 謎Ⅲ: 15: 推理: 論理的帰結: 情事)。

*** 謎の答えに随伴する謎として「犯人＝相手は誰か？」という謎が提示され、それをめぐる推論が消去法（アリバイ）に基づいて展開される。（HER. 謎Ⅲ：提示：不義の相手は誰か？）；（HER. 謎Ⅲ：推理：部分的解答）。

(38)

Nous avons passé le week-end ensemble, et elle est aussi terrorisée que moi, et même, bizarrement, plus que moi. » わたしたち週末は一緒だったし、それに彼女は私と同じように恐怖におののいている、ことによったら、奇妙なことだけど、この私よりも。」

* 二人は週末（＝土曜日）を一緒に過ごした。（ACT. 帰宅：8：帰宅前の行動）

** リンダは「奇妙なことに」当事者であるミリセントより怯えている。ここで別種の新たな謎が生じているように見えるが、これは最終的には「リンダは何者か？」という謎に関連している。（HER. 謎Ⅳ：5：提示：リンダはなぜミリセントより怯えているのか？）。

(39)

Car, dans sa tête, l'idée de David amenant une femme dans leur maison, que les enfants y soient ou pas, l'idée de David amenant cette femme et lui prêtant sa robe de chambre, l'idée demeurerait complètement démente. David ne regardait pas d'autres femmes. D'ailleurs, David ne regardait personne. Et ce mot « personne » retentit en elle tout à coup, comme un gong. C'était vrai qu'il ne regardait personne. Même pas elle. David était né beau et aveugle. というのも、彼女の頭の中では、デイヴィッドが、子供たちがいようがいまいが、女を二人の家に連れ込むなんてことは、その上、その女に彼女のガウンを貸し与えるなんてことは、やはり到底考えられないことだったからだ。デイヴィッドは他の女には見向きもしない。そもそもデイヴィッドは誰にも目を向けない。そのとき突然、その「誰にも」という言葉が彼女の中で銅鑼の音のように鳴り響いた。あの人は本当に誰にも目を向けない。私にさえも。デイヴィッドは生まれつきの美男子で生まれつきの盲人なのだ。

* リンダが不義の相手ではないという推論の根拠は、リンダにアリバイがあることだけではない。デイヴィッドは一般に女性には目を向けないのである。妻であるミリセントにさえも！ただしこの発見ないし想起は、その根本的理由（彼の男性への嗜好）に気づくことには繋がらない。「美男で男色」（ダヴィデ）が「美男で盲人」（デイヴィッド）に置き換えられるのだ。（HER. 謎Ⅴ：9：謎の知覚：デイヴィッドが女性に関心を示さないのはなぜか？）。

** ミリセントの推論が前提としているのは、リンダが、

ついでミリセント自身が純粋に〈女性〉であること、そしてデイヴィッドが純粋に〈男性〉であることである。（SYM. A/B：A=男、B=女）

(40)

Bien sûr, après dix ans il était assez naturel, presque plus décent, que leurs relations physiques soient pratiquement réduites à néant. Bien sûr, il était naturel qu'après tout ce temps il ne reste plus grand-chose de ce jeune homme acharné et fiévreux et si inquiet qu'elle avait connu, mais néanmoins il était presque étrange que ce beau mari, cet aveugle si séduisant...

もちろん、結婚して十年にもなるのだから、夫婦の交わりが実質ゼロになっているのは当たり前、というかむしろ良識に適っているとさえいえる。それだけの年月が経っていれば、自分の知るかつての食欲で血気盛んな青年、ひどく落ち着きのない若者の面影が薄れてしまっているというのも当たり前のことだ。けれどそれにしてもどうしても不可解なのは、このハンサムな夫、盲目だとはいえ、これほど魅力的な男が...

* 夫婦の倦怠期に関する知識が援用されている。（REF. 夫婦の生態学）。

** ミリセントはデイヴィッドをめぐる謎を〈常識〉によって無害化しようとするが、その謎が解消されることはない。（HER. 謎Ⅴ：10：否認の試みと挫折：サスペンス）。

(41)

– Millicent, dit Linda, que penses-tu de tout ça ?

Elle eut un geste circulaire de la main pour souligner le désordre ambiant.

– Que veux-tu que je pense ? dit Millicent. Ou Mrs Briggs, la gouvernante, n'est pas venue lundi ranger la maison, ou David a passé le week-end ici avec une gourmandine.

「ねえミリセント、とリンダは言った、このあり様どう思う？」彼女は、ぐるりと手で周りを指し示し、部屋の散らかりようを際立たせて見せた。

「どう思うかですって？とミリセントは言った、それは、月曜に家政婦のブリッグスさんが来なくて掃除しなかったか、ここで尻軽女とデイヴィッドが終末を過ごしたか、どっちかでしょう。」

* （ACT. 対話：6：質問する；7：応答する）。

** 謎を解明すべく、答えが二者択一によって提示されるが、それは偽りの選択で、取るに足る解は一つである。（HER. 謎Ⅲ：16：解明の試み：修辭的二者択一）

*** 家政婦を雇うことは〈富裕〉の記号である。（SEM. 富裕）

(42)

Et elle se mit à rire. Au fond, elle était plutôt soulagée. Le problème était bien posé, les choses étaient simples. On peut très bien rire avec une bonne amie du fait d'avoir été trompée et de le découvrir, soudainement, grâce à une partie de golf trop ventée.

そこで彼女は笑い出した。内心、彼女は案外ほっとしていたのだ。問題がはっきりとし、事態は単純だった。浮気されて、それがある日突然、強風のために途中で切り上げたゴルフのおかげでばれたなんてこと、気の合う友達と笑い飛ばすこともできるのだから。

* (ATC. 笑い 2 : 1 : 笑い始める) ; (ACT. 内省 : 8 : 問題の—自己欺瞞的一整理)。

** 不義は一般に〈問題〉であるが、ここでは部分的に既に〈解決〉でもあり、「相手は誰か?」という問題は、それが女性であると想定される限りにおいて二義的な問題でしかない。(HER. 謎Ⅲ : 17 : 謎を無害化する偽りの解 : ノーマルな情事)。

*** 不義には共通の(普遍的な?) シナリオがある。それは文化に組み込まれ、社交上の慣例(典例?)の一部と化している。(REF. 情事のコード、コードとしての情事)。

(43)

- Mais, dit Linda (et elle se mit à rire aussi), mais que veut-tu dire, quelle gourgandine ? David passe son temps avec toi, tes enfants et vos amis. Je vois mal comment il pouvait trouver le temps de fréquenter une vraie gourgandine.

「でも、とリンダは言った(彼女もまた笑い出した)、どこにそんな尻軽女がいるって言うの? デイヴィッドはいつもあなたや、子供たちや、友達とじゃじゃじゃ。彼に尻軽女と付き合う時間があるなんてとても思えないわ。」

* リンダの笑いは同じ笑いでもミリセントの笑いへの同調ではなく反語的応答である。(ACT. 笑い 2 : 2 : 反応する)。(ACT. 対話 : 8 : 反論する)。

** リンダはミリセントが提示した可能性を否定する。(HER. 謎Ⅲ : 18 : 推理 : 想定された答えの排除)。

*** リンダはミリセントより慧眼な者として振る舞っている。(HER. 謎Ⅳ : 6 : リンダはなぜ確信をもつて的確に反論できるのか?)。

(44)

- Oh, dit Millisent en riant de plus belle - et vraiment elle se sentait soulagée, sans savoir de quoi -, c'est peut-être Pamela ou Esther ou Janie.... Va savoir.

「そうかしら、とミリセントはさらに声高に笑いながら言っ

た——じじつ彼女はほっとした気持ちになっていた、何にほっとしたのかは分からないままに——、じゃあ、たぶんパメラかエスターかジェイニーでしょう... 分からないけれど。」

* (ACT. 笑い 2 : 3 : より一層笑う)。(ACT. 対話 : 9 : 仮説を立てる)。

** ミリセントは一層朗らかになるが、それはデイヴィッドの不義の相手が女性であるという前提が維持されたからであり、真実に直面する危機が回避されたからである。ここで「相手は誰か?」という問題はその深刻さを失い、面白おかしい遊戯的様相さえ呈するようになる。自分が安堵した理由をミリセントが知らないのは当然である。その理由がことの真相に関わるからである。かくしてミリセントの自己欺瞞が謎を維持している。(HER. 謎Ⅲ : 19 : 「相手は誰か?」; 解明の試み : 偽りの答え)。

*** 固有名はいずれもイギリス人女性のそれである。(SEM. イギリス性)。

(45)

- Je ne crois pas qu'aucune lui plaise, dit Linda tristement, et elle eut un mouvement pour se lever qui fit presque peur à Millicent.

「誰も彼の好みじゃないと思うわ」、とリンダは悲しそうに言い、立ち上がる仕草をしたが、それを見てミリセントは怖くなった。

* (ACT. 対話 : 10 : 再び反論する)。(ACT. 座る : 3 : 立ち上がる仕草をする)。

** リンダの指摘はそれ自体として正しい。ただし、デイヴィッドは特定の女性に関心がないのではなく、女性一般に興味がないのである。(HER. 謎Ⅲ : 20 : 解明の試み : 提示された答えの棄却)。

** (ACT. 退去 : 1 : 腰を上げる)。

*** リンダは真相を知っているように見える。(HER. 謎Ⅳ : 7 : なぜリンダは事情に通じているのか?)。

(46)

- Voyons Linda, dit-elle, même si nous étions tombées en pleine adultère, tu sais bien que nous n'en ferions pas un drame. Voyons il y a dix ans que nous sommes mariés, David et moi. Chacun de nous a eu quelques occasions... et le drame s'arrête là...

「まってリンダ、と彼女は言った、たとえこれが真正銘の情事だったとしても、だからって大げさに騒ぎ立てることないわ。いい、デイヴィッドと私は結婚して十年にもなるのよ。おたがい何回かこんなふうになりかけたことはあったわ、でもそれ以上のことにはならないの。」

* (ACT. 対話 : 11 : 説得する)。

** 暗黙裡に了解されていたノーマルな情事という仮説が明示される。(HER. 謎Ⅲ：21：推論：部分的答え)。

*** 「長年連れ添った夫婦なら大抵いくどか情事の機会があるものだ」、といったたぐいの諺ないし常識への参照。(REF. 夫婦の生態学)

(47)

- Je sais, dit Linda, rien de tout cela n'est très important. Je sais mais j'aimerais bien m'en aller. Je voudrais rentrer à Londres.

「そうね、とリンダは言った、こんなこと大したことじゃないわ。分かってるけど、どうしてもここにはいたくないの。ロンドンに帰りたいの。」

* (ACT. 対話：12：承服しない)。

** この場に留まっても差し支えない合理的な根拠があるのに、リンダはなぜあくまで立ち去りたいと願うのか、不可解である。(HER. 謎Ⅳ：8：リンダの不可解な態度)。

*** (REF. イギリスの地理：ロンドン)。

(48)

- Tu n'aimes pas beaucoup David, n'est-ce pas ?
「あなたはデイヴィッドのことが好きじゃないのね？」

* (ACT. 対話：13：詰問する)。

** リンダの不可解な態度に対して、ミリセントがその理由を探ろうとする。(HER. 謎Ⅳ：9：解明の試み)。

(49)

Il y eut une seconde de stupeur dans les yeux de Linda, puis une sorte de chaleur, de tendresse :
一瞬リンダの目に驚きの色が浮かんだかと思うと、次の瞬間、それが何か熱いもの、愛情の色に変わった。

* なぜリンダはミリセントの問いかけに不意を突かれたように驚くのか。(HER. 謎Ⅳ：10：リンダの奇異な反応)。

** リンダが示す表情の変化は、昔日の恋を思い浮かべる乙女のそれである。(REF. 浪漫派的恋愛)。

(50)

- Mais si, j'aime beaucoup David. Je l'ai connu à cinq ans, il était le meilleur ami de mon frère à Eton...

Et, après cette phrase stupide et sans intérêt, elle regarda fixement Millicent comme si elle avait énoncé là une chose des plus importantes.

「そんなことないわ、デイヴィッドのことは好きだわ。彼のことは五歳の時から知ってるのよ、イートンで兄の一番のお

友達だったんだから...」

だが、そんな愚にもつかないどうでもいいようなことを言った後、彼女はまるで何かこの上なく重大なことを口にしてしまったかのように、じっとミリセントを見詰めた。

* (ACT. 対話：14：答える)。

** 兄の級友デイヴィッドはリンダの幼馴染であり、初恋の相手であった。(HER. 謎 5：答え：リンダの過去)；(SEM. 幼児性)。

*** イートン校は上流階級の子弟が入るイギリスの名門校である。(REF. イギリスの学制)；(SEM. 富裕)。

**** リンダの何気ない言葉が孕んでいる「この上なく重大なこと」とは何か？ここで指し示されるデイヴィッドに関わる事の真相は L. 63で直観され、L. 66で暴かれる。(HER. 謎Ⅴ：11：真相の在り処)。

(51)

- Bien, dit Millicent, alors je ne vois pas comment tu ne pardonnerais pas David une chose que je suis prête, moi-même, à lui pardonner. La maison est réellement en désordre, mais j'aime mieux rester ici que de rentrer dans cet embouteillage infernal jusqu'à Londres.

「そう、とミリセントは言った、それなら、デイヴィッドの妻であるこのわたしが許す気になっていることを、あなたが許せないなんてことないわよね。家はたしかに散らかっているけど、大渋滞の中をロンドンまで帰るより、ここに泊っていった方がましよ。」

* (ACT. 対話：15：提案する)。

** 謎への答えが(ノーマルな)不倫であるということが繰り返されている。(HER. 謎Ⅲ：22：不完全な答え：不倫)。

*** (ACT. 退去：2：留まる)。リンダが留まるのは、物語の中では行動としてその方が賢明で合理的だからであるが、物語の上ではミリセントの話し相手であり続けるため、そうやって物語(の興味)を維持するためである。

**** (REF. ロンドンの交通事情)。

(52)

Linda attrapa la bouteille de brandy et s'en versa une énorme rasade, tout au moins aux yeux de Millicent.

リンダはブランデーのボトルをつかみ、中身をコップになみなみと注いだ。少なくともミリセントの目にはそう見えた。

* (ACT. 応接：5：飲み物を注ぐ)。

** 強いアルコールの摂取は覚悟を決めたことの記号である。(REF. アルコールをめぐる行動心理)。

*** ミリセントはリンダの行動を記号として知覚するが、何の記号であるか、その意味を解釈してはいない。(HER.

謎Ⅳ：11：謎の知覚)。

(53)

-David est très gentil avec toi, dit-elle.

-Mais bien sûr, dit Millicent sans mentir.

Et il était vrai qu'il avait été un homme prévenant, courtois, protecteur, plein d'imagination parfois et, malheureusement, le plus souvent pratiquement neurasthénique. Mais ça, elle n'allait pas raconter à Linda. Elle n'allait pas lui raconter David allongé sur le divan à Londres, les yeux fermés, des journées entières, refusant de sortir. Elle n'allait pas lui raconter les horribles cauchemars de David. Elle n'allait pas lui raconter les coups de téléphone maniaques de David à un homme d'affaires dont elle ne pouvait même pas se rappeler le nom. Elle n'allait pas lui raconter les colères de David quand un des deux enfants manquait un examen. Elle n'allait pas non plus raconter à Linda que David pouvait être odieux en matière d'ameublement, de tableaux, ni à quel point David, le prévenant David, pouvait être oublieux de ses rendez-vous, y compris avec elle. Ni parfois dans quel état il rentrait. Elle ne pouvait pas non plus raconter à Linda comment elle l'avait aperçu une fois, de dos dans la glace, et avec quelles marques...

「デイヴィットは優しい旦那さんだわ」と彼女は言った。

「もちろんよ」とミリセントは正直に言った。

確かに彼はよく気がきき、礼儀正しく、頼りになる人で、ときには突飛なことも思いつくけれど、残念なことに、よくノイローゼ気味になることがあった。しかしそれはリンダには言わないでおこう。言わないでおこう、ロンドンでは何日も目を閉じてソファベッドに横になったまま外出しようともせず丸一日過ごすデイヴィットのことは。言わないでおこう、怖い夢にうなされているデイヴィットのことは。言わないでおこう、名前も思い出せないけれど、どこかの仕事相手にしつつこいほどに電話を掛けていたデイヴィットのことは。言わないでおこう、子供がテストに合格しなかった時、ひどく怒ったデイヴィットのことは。言わないでおこう、家具や絵のこととなると人が変わったようになるデイヴィット、よく気がきくはずが、私との待ち合わせも含め、しばしば待ち合わせをすっぽかすデイヴィットのことは。それにまた、ひどい状態で帰宅するデイヴィットのことも。一度、鏡に映った彼の背中を見たとき、それがどんなだったか、そして、そこにどんなあざがあったか、そんなこともリンダには話せない。

* (ACT. 対話：16：確認する；17：同意する)。(ACT. 内省：9：デイヴィットの本性を照らし出す回想)。

** ここでメッセージは、発話によってではなく、発話の否定として提示される内的独白によって担われる。(REF. レトリック：暗示的看過法 (prétérition))

*** メッセージの内容は、デイヴィットの本性に関する

情報であり、デイヴィットは何者か？という問いに対する答えを構成する諸要素であるが、答えそのものではない。(HER. 謎Ⅴ：12：答えの諸要素)。列挙されるのは、デイヴィットの表向きの性格をことごとく疑問に付す裏の性格である。(SEM. 二重人格者)。ソファベッドへの言及は精神分析への参照に等しい。(SEM. 神経症)。
**** 鏡像は、裏と表、真実と虚偽、善と悪の対立の主題論的形象である。(SYM. 世界の二重化)。

(54)

Et, à ce simple souvenir, quelque chose chancela en elle : son comportement d'Anglaise, de femme convenable, そういった記憶が浮かんできたとき、彼女の中で何かがぐらついた。イギリス人女性、立派な妻としての彼女の振る舞いが。

* これだけのことを思い出してみれば彼女は決定的だが、なお部分的な答え——デイヴィットの情事——に至りつく。(HER. 謎Ⅲ：23：部分的答え：不倫)

** 「イギリス人女性」を「立派な妻」に結び付ける連想は、イギリス人女性の国民性への参照に基づいている。(REF. 女性の類型学)。

(55)

et elle demanda - enfin elle s'entendit demander - : « Tu crois que c'est Ethel ou Pamela ? » Parce que, enfin, pratiquement, il n'avait pas le temps de voir d'autres femmes qu'elles. Les femmes, même celles qui jouent Back Street, exigent un certain temps de l'homme qu'elles aiment. Les histoires de David ne pouvaient être, si elles existaient, que des choses brutales, effrénées et rapides, des histoires de prostituées ou de spécialistes. Et comment imaginer David, si orgueilleux, si délicat, en masochiste ?
そして彼女は尋ねた——というより次のように尋ねる自分の声が聞こえた。「エセルかしら、それともパメラ？」というの、要するに、実際上彼にはその二人以外、女に会っている時間などないのだから。「裏町」を地で行く女たちでさえ、愛する男からはある程度の時間を求めるのが常だ。デイヴィットの一件は、もし本当に何かあるのだとして、突然で、激しく、素早い関係、売春婦かその道のプロとの関係でしかありえない。それに、あれほどプライドが高くて、あれほどデリケートなデイヴィットがマゾヒストだなんてどうして想像できよう。

* (ACT. 対話：18：尋ねる)。(ACT. 内省：10：謎Ⅲをめぐる推理)。

** 「～する自分の声が聞こえた」という記述が示すのは、自己が主体と客体に分離する事態である。人格の二重化、自己の中の他者といったテーマは、L. 53で導入された

鏡の象徴的主題に接続し、それを展開している。(SYM. AB: A=自己、B=他者: 自己疎外 (*aliénation*=自己の他者化)。

*** 愛人の地位に甘んじる女の系譜、その種の女性の生態学への参照が見られる。(REF. 文学; ファニー・ハーストの小説『裏町』)

**** (SYM. A/B: S/M: 嗜虐/被虐: 能動/受動)。(SEM. 性愛の倒錯性・暴力性)。この読み——背中に残された「あざ」=マゾヒスト——は記号 (*signe*) の解説としては必ずしも間違いではなく妥当でさえあるが、事実と照らして正しくない。この種の誤読は L. 65 ——(激しく乱れたベッド=激しい性交(ただしあくまでノーマルな)——でも繰り返される。「あざ」やベッドの激しい乱れは、相手が男性であることの指標 (*indice*) なのである。

(56)

La voix de Linda lui parvint de très loin, lui sembla-t-il.
- Pourquoi penses-tu à Pamela ou à Ethel ? Elles sont tellement exigeantes...

- Tu as raison, dit Millicent.

リンダの声はずっと遠くから聞こえてくるように、彼女には思われた。

「どうしてパメラやエセルなんか?あのふたり、とっても要求が多いのよ...」

「そうね、あなたの言う通りだわ」とミリセントは言った。

* (ACT. 対話: 19: 答える; 20: 是認する)。

** (HER. 謎Ⅲ: 24: 推理: 仮説の棄却)。

*** (REF. 女性の生態学・類型学、情事に関する常識)

(57)

Elle se leva, se dirigea vers le miroir du salon et s'y regarda. Elle était belle encore, on le lui avait assez dit et, parfois, assez prouvé, et son mari était un des hommes les plus charmants et les plus doués de leur milieu. Alors pourquoi avait-elle l'impression de voir en face dans ce miroir une sorte de squelette sans chair et sans nerfs et sans os et sans lait ?

彼女は立ち上がり、サロンの鏡の方に向かってゆき、自分の姿を映してみた。自分はまだまだきれいだ。何度も周りからそう言われてきたし、ときには、その証拠を示されたこともある。夫だって自分たちの仲間内では一番ハンサムで、一番才能に恵まれた男だ。ならば、どうしてこの鏡に映っている自分の姿は、肉も神経も骨も乳もない骸骨のように見えるのだろうか?

* (ACT. 自分の姿を見る: 1: 立ち上がる; 2: 移動する; 3: 鏡を見る)。

** 虚像vs実像のテーマを発動させる鏡のモチーフが再登場する。(SYM. 鏡像: 自己の二重化)。

*** (REF. 理想のカップル像)。

(58)

- Je trouve dommage, dit-elle - elle ne savait plus très bien de qui elle parlait -, je trouve dommage que David n'ait pas plus d'amis hommes aussi bien que d'amies femmes. Tu as remarqué ?

「残念なことだわ、と彼女は言った——そう言いつつ誰のことを言っているのかももうよくわからなかったのだが——、デイヴィッドには女友達がいなけど男友達もないの。あなた気づいてた?」

* (ACT. 対話: 21: 謎Vをめぐる疑問点を挙げる)。

** デイヴィッドに男の愛人がいる可能性が排除されている。(SYM. A/B: A=男性、B=女性)。

*** デイヴィッドに対してミリセントがもつ認識の自明性が失われつつある。(HER. 謎V: 13: 謎の提示)。デイヴィッドには男の友達がいない。しかるに彼が男に感じるのは友情ではなく愛情である。(HER. 謎V: 14: 正解へのヒント)。

(59)

—Je n'ai jamais rien remarqué, dit Linda, ou plutôt la voix de Linda parce que la pénombre s'était installée.

全然、気づいたことなんか何にもないわ、とリンダが、というよりリンダの声が言った。もうすでに周りは薄闇に包まれていたのだ。

* (ACT. 対話: 22: 否認する)。

** リンダは真実を知っているが、物語の興味を維持すべく、彼女の口からそれが直ちに明かされることはない。(HER. 謎V: 15: 真実の否認: サスペンス)。

*** 薄暮は半ば明るく半ば暗い中間の状態である。(SYM. 非A非B: A=明、B=暗: 中間)。

(60)

Et Millicent ne voyait plus d'elle qu'une silhouette, une sorte de souris plantée sur le divan, et qui savait, mais qui savait quoi ? Le nom de la femme. Pourquoi ne pas le lui dire ? Linda était assez méchante ou assez gentille - dans ces cas-là pouvait-on savoir ? - pour sussurer un nom. Alors pourquoi, dans ce soir de juillet, vêtue de sa solitude et de son tailleur clair, avait-elle à ce point l'air d'une femme épouventée ?

ミリセントには彼女の影しか見えなかった。ソファーに座り込んだネズミのような影、それは何かを知っている、けれど何を?相手の女の名前だ。なぜ言ってくれないんだろう?リ

ンダは意地悪であるにせよ、親切であるにせよ——この際どっちとも言えるだろう——、そっと名前ぐらい教えてくれてもいいはずだ。ではなぜ、この七月の夕べに、みずからの孤独と明るい色のスーツをまとって、こんなにもおびえた様子をしているのだろうか？

* (ACT. 内省：11：謎Ⅳをめぐる疑問点を挙げる)。

** ミリセントの直観が正しいとすれば、リンダは相手の女の名を知っている。しかるに、リンダにはそれを明かさないう合理的理由はない。では、リンダはなぜそうしないのか？リンダの様子は異様で、態度は不可解である。(HER. 謎Ⅳ：12：疑問の深化)。

*** リンダはデイヴィッドの浮気相手が誰であるか、知っているのに明かさない。その物語上の理由は謎Ⅳに関わるが、語り上の理由は謎Ⅲに関わり、解答を宙吊りにすることによって、物語に緊張感を与え、物語的興味を増大ないし維持することにある。(HER. 謎Ⅲ：25：解明の引き伸ばし、サスペンス)。

**** ソファベッドへの言及は〈精神分析〉への参照に等しく、ネズミへの変容、抑鬱性の恐怖、失語状態は〈幻想〉、〈ヒステリー〉、〈去勢〉などの連想を伴う。リンダは〈知っている者〉であると同時に〈言うことができない者〉である。(SEM. 神経症)。リンダが担っている意味素の一つ〈幼児性〉(L. 15)も、去勢の効果としての失語状態 (*in-fans*) に関連づけられる、あるいはそこに由来するとみなすことができる。

(61)

Il fallait ramener tout cela à la raison, à la terre. Si c'était vrai, il fallait admettre que David ait une liaison avec une femme quelconque, une amie ou une professionnelle. Il ne fallait pas surtout en faire une histoire sordide et peut-être même, plus tard, pourrait-elle se venger gaiement avec Percy ou un autre. Il fallait ramener les choses dans leur mondanité, leur classicisme.

この一件は理性的に対処すべきで、大げさに考えるのは禁物だ。もしそれが本当であって、デイヴィッドに、知り合いの誰かであれプロであれ、女がいたとしても、それは認めてやらないといけない。それを三面記事並みの下世話な話にしてしまうのはもってのほかだ。それにいつか、お返しにパーシーか誰かと面白おかしく浮気してやたっていいわけだ。この際、ものごとをそれにふさわしい社交的次元、古典的次元に引き戻して考えないといけない。

* (ACT. 内省：12：覚悟を決めて方針を立てる)。

** いかに衝撃的な出来事もコード化されたものである限り、そこから距離を取ることができ、その衝撃に耐える余地が生まれ、アイロニーの効用とでも呼ぶべきものが得られる。しかるに、ここでのミリセントの内省は、ま

さしくその種の浮気をめぐるコードに依拠し、そうしたコードとの戯れからなっている。(REF. 浮気の滑稽芝居)。

*** 「パーシー」には意味素として〈イギリス性〉と〈男性性〉に加え、状況からして〈任意性〉も認められるだろう。(SEM. イギリス性、男性性、任意性)。

**** 女と浮気しているデイヴィッドへの仕返しは、ミリセントが男と浮気することによって成立する。この応報の相互関係が成り立つのは、あくまで男／女の対立の上においてである。(SYM. A/B：A=男性、B=女性)。

(62)

Aussi, elle se leva, épousseta le divan d'une main royale et déclara :

- Écoute-moi, chérie, de toute façon nous allons dormir ici. Je vais voir dans quel état sont les chambres, là-haut. Et, si jamais mon cher époux y avait fait une fête excessive, je téléphonerais à Mrs Briggs, qui est à deux kilomètres, qu'elle vienne nous aider. Cela te dit ?

- Parfaitement, dit Linda dans l'ombre, parfaitement, comme tu veux.

しからばと、彼女は立ち上がって、堂々たる手つきでソファのちりを払う仕草をし、こう宣言した。

「ねえ、いいこと、何がどうあっても私たちは今日ここに泊まりましょう。二階の寝室がどうなっているか見てくるわ。それで、もし万が一私の良人が破廉恥なパーティでもやっていたようだったら、電話でニキロ先に住んでいるブリックさんと呼んで、片付けを手伝ってもらうことにしましょう。いい？」

「分かったわ、とリンダは暗闇の中で言った、そうしましょう。」

* (ACT. 実況見分：1：立ち上がる；2：埃を払う；3：宣言する)。(ACT. 対話：23：宣言する；24：同意する)；(ACT. 退去：3：断念する)。

** ミリセントの仕草は覚悟を決めた人間のそれである。(REF. 振る舞いの記号学)。

*** 公的空間と私的空間の分節に基づいて居間と寝室が対置される。それは偽装された表 (*dessus*) と真相が潜む裏 (*dessous*) の対立である。(SYM. A/B：A=外(表)、B=内(裏))。

**** ミリセントはドラマの核心に臨むに当たって精神的余裕を見せている。(REF. 処世術としてのユーモア)。

(63)

Et Millicent se leva et se dirigea vers l'escalier ; la photo de leurs deux fils était sur le chemin et elle leur sourit distraitement. Ils iraient à Eton, comme David et qui déjà ? Ah oui, le frère de Linda.

そこでミリセントは立ち上がり、階段の方へ向かった。かれらの二人の息子の写真が途中に掛けてあって、彼女はそれに向かって何気なくほほ笑んだ。この子たちもイトンに通うことになるんだ、デイヴィッドみたいに、デイヴィッドと、そしてあともうひとり、ええと誰だっけ？あ、そうだ、リンダのお兄さんだ。

* (ACT. 実況見分:4:移動する);(ACT. 微笑む);(ACT. 内省:13:自問自答する)。

** 写真は真実を映し出す鏡のテーマを引き継いでいる。(SYM. A/B:A=実像、B=虚像)。

*** 象徴の本質的特徴のひとつは、それが繰り返すことにある。そこに類推的推理(アナロジー)が成り立つ根拠がある。(SYM. 象徴の本性:反復回帰)。

**** リンダの兄とデイヴィッドが同性愛関係にあったこと(あるいは、場合によっては、いまだに同性愛関係にあること)にリンダはまだ気づかない。これはすなわち、問題の写真があくまで真実を知る手がかりとして読者に与えられているということだ。(HER. 謎Ⅲ:26:真実のヒント)。

(64)

Elle s'étonna de devoir s'appuyer à la rampe pour monter l'escalier. Quelque chose lui avait coupé les jambes ; ce n'était ni le golf ni une possibilité d'adultère. N'importe qui peut envisager d'être trompé et doit l'envisager, et ce n'est pas là une raison pour faire des drames ni des grimaces. En tout cas pas dans l'esprit de Millicent.

どうしたとか、そのとき階段を上るのに手すりにつかまらなければならなくなった。なぜか膝から力が抜けてしまったのだ。ゴルフをしたからでも、不倫の可能性があるからでもなかった。だれであれ相手に裏切られることは想定しうることだし、また、そうしなければならない。だからといって大げさに騒いだり、しかめ面をしたりすることはないのだ。ともかくミリセントはそう思っていた。

* (ACT. 驚く);(ACT. 腰を抜かす)。

** (ACT. 内省:14:既定方針を維持する)

*** 「裏切られても騒ぎ立てるには及ばない」。(REF. 情事をめぐる格率への依拠)。

**** ミリセントの身体(無意識)は正しい答えを悟ったが、彼女の意識は偽りの答え——普通の情事——を維持する。(HER. 謎Ⅲ:27:偽の答えの維持)。

(65)

Elle entra dans « leur » chambre, la chambre de « leur » maison, et remarqua sans la moindre gêne que le lit était défait, ravagé, écumé comme il n'avait jamais été, lui semblait-il, depuis son mariage avec David.

彼女は「自分たちの」寝室、「自分たちの」家の寝室に入った。すると、案の定、ベッドは乱れていた、まるで強盗にでも荒らされたみたいに——デイヴィッドと結婚してからいまだかつてこんなに乱れたことはなかったと思われるくらい——乱れていた。

* (ACT. 実況見分:5:現場に到着する;6:実施する—L.68に続く)。

** 神聖なる私有権が侵害されている。(SEM. 瀆聖)。

*** ベッドの乱れ具合は性行為の強度に比例する(L.20はその換喩、L.28はその隠喩である)。(SEM. 性愛の暴力性)。

**** (HER. 謎Ⅲ:28:偽の答えの維持・強化)。

(66)

La seconde chose qu'elle remarqua fut la montre sur la table de chevet, sur sa table à elle. C'était une montre waterproof, une grosse montre d'homme et elle le soupesa un instant du bout des doigts, incrédule et fascinée, avant de comprendre vraiment que c'était un autre homme qui l'avait oubliée là. Elle comprit tout.

つぎに彼女の目に留まったのは、枕元のテーブルの上、それも自分のテーブルの上に置いてある腕時計だった。それは防水性で、大ぶりの男物の腕時計だったが、彼女は不思議そうに見とれるような面持ちで、指の先でちょっとその重みを測ってみたが、次の瞬間、そこにそれを置き忘れていったのは男だということをはっきりと理解した。彼女はすべてを理解した。

* 腕時計は防水性という機能を備えている。その実用的価値は美的価値と対立しており、そのことにおいて〈男性性〉を意味している。(SEM. 男性性)。

** 省略三段論法(エンチュメーマ)⁸により、「男性用の腕時計の所有者は男性である、ゆえに不倫の相手は男性である」という推論が成り立っている。それにしても、ここでミリセントが理解した「すべて」のうちに、相手の男の名前は含まれているであろうか？答えは然りである。L.60でリンダは「何かを知っている、けれど何を？相手の女の名前だ。」とあるが、この言は文字通りに取らなければならない。つまり、むろん相手が女であると思っ

⁸ ここでは「その腕時計は問題の人物の所有物である」という小前提が省略されている。そもそも「男性用の腕時計の所有者は(すべて)男性である」という大前提からして正しくないが、それも重要なことではない。なぜならこの作品の物語的興味は、性別に関する重大な思い違いとその発見を物語ることに尽きるものであって、その発見が厳密に正しい推論に基づいていることを律儀に示すことにはないからである。

ているのはミリセントの思い違いであるが、リンダが相手の名前を知っているというのはそうではない、ということだ。リンダが知っているデイヴィッドの浮気相手の名前、それは彼女の兄の名前以外にありえない。謎Ⅲの解明と謎Ⅴの解明は一致する。(HER. 謎Ⅲ：29：推理：全面的解明)；(HER. 謎Ⅴ：16：推理：全面的解明)。

*** 〈男性性〉は「防水性の大ぶりの腕時計」によってコノテートされると同時に、「男物の腕時計」によってデノテートされている。「防水性の大ぶりの男物の腕時計」は、〈男性性〉を二重に意味しているという点で冗長な記述と見ることができるが、問題は〈男性性〉という意味素そのものではない。問題なのは、ここでの〈男性性〉が象徴的には〈男性〉／〈女性〉の対立の上ではなく、その対立の崩壊の上に立っているということ、それゆえ、その内容が変質しているということである。すなわち、ここでの〈男性性〉は同性愛の文脈における意味素なのである。(SYM. 対立の解除：AB：A=男性、B=女性)。
**** 物語の要は謎の解明（問題の人物は誰か？）であって、登場人物の心理ではない。ミリセントは「はっきりと」「すべてを」「理解した」が、何を感じたかは示されていない。しかるに、人物の心理描写の欠如は、今度はその人物自身に係る謎を惹起する。(HER. 謎Ⅵ：1：浮上：ミリセントは何者か？)。

(67)

En bas, il y avait Linda, inquiète et de plus en plus apeurée et de plus en plus dans le noir.

階下ではリンダが、心落ち着かず、ますます怯え、ますます暗闇に包まれていた。

* 直前の文に続き、語りは一時的にミリセントの心理的主観から撤退する。ここで強調されるリンダの不安と怯えは、ミリセントの感情描写の欠如を埋め合わせる心理的補償物ともみなしうが、その分だけ読者の関心はなお一層ミリセントの心理に向けられ、彼女の人格に係る謎はさらに深まる。(REF. 省略法 (エリプス)：ミリセントの感情描写の修辭的欠落)。

(68)

Millicent redescendit, et regarda en face curieusement, avec une sorte de pitié, cette chère Linda qui savait aussi : ミリセントは下に降りてきて、目の前にいるこの愛しいリンダを興味深そうに、一種の憐れみのこもった眼差しで眺めた。彼女も知っているのだ。

* (ACT. 実況見分：6：帰着する)。

** 「彼女も知っている」ことの中身は、L. 66の「彼女はすべてを理解した」の「すべて」と一致している。ミリセントがリンダに「憐れみ」を抱き、「彼女もまた知っ

ている」ことを知ったということは、リンダはデイヴィッドの同性愛嗜好を自分の兄との関係を通して知っていたということ、その発見によって一種の去勢作用を蒙ったということ、それが現在の彼女が見せる不可解な振る舞いの原因であること、以上のリンダの不幸な過去が明らかになったということである。加えて、L. 38の記述「それに彼女は私と同じように恐怖におののいている、ことによつたら、奇妙なことだけど、この私よりも」に仄めかされているのは、デイヴィッドとリンダの兄の関係はいまだに続いているということ、デイヴィッドの不倫相手はほかでもないリンダの兄であるということである。この事実こそがミリセントの抱く「一種の憐れみ」の因つてくるころなのだ。(HER. 謎Ⅳ：13：解明)。

(69)

- Ma pauvre chérie, dit-elle, je crains bien que tu n'aies raison. Il y a une combinaison d'un rose saumon importable dans la chambre à coucher.

「やっぱり、と彼女は言った、どうやらあなたの言う通りのようね。寝室にサーモンピンクの派手なシュミーズがあったわ。」

* (ACT. 実況見分：7：報告する)；(ACT. 対話：25：報告する)。ミリセントは感じる主体として撤退し、話す主体として存続する。

** ミリセントの報告の言葉の意味は、「デイヴィッドは確かに浮気をしていて、案の定、相手は素人女ではなかった」ということである。それは文字通りの意味では虚偽である。(HER. 謎Ⅲ：30：偽りの報告)。しかし、リンダもまた「知っている」のであれば、この嘘にどのような意味、どれほどの価値があると言うのだろうか？(HER. 謎Ⅵ：2：再浮上：なぜミリセントはうその報告をするのか？)。

*** 「派手なサーモンピンクの下着」は「大ぶりの防水性腕時計」と対立している。象徴の観点から見ると、ここでは「男／女」の対立の回復が志向されている。(SEM. 派手なサーモンピンクの下着：女：プロ)；(SYM. A／B：A=男、B=女)。

**** (REF. 情婦の類型：素人／プロ)。

おわりに

HER. 謎Ⅵ：3：開かれたままの問い

物語で問われている出来事(謎Ⅲ)は、L. 3で予感として表現され、L. 8で疑問として提示され、L. 20で痕跡として描写され、L. 37で謎として定式化される。その謎とは、すなわち、夫デイヴィッドの素行に関する謎

——デイヴィッドは不義をはたらいていたのかどうか、そうだとすれば相手は誰か、という問い——である。L. 66で読者は、その謎の全面的解明——デイヴィッドは不義をはたらいており、その相手は男性で、しかもリンダの兄である——に立ち会うことになる。これをもって謎解きとしての物語の興味は尽きたと言える。

しかし物語はそこで終わっていない。ミリセントは、階下で待っているリンダに自分が見てきたものの報告をする。ミリセントが最後のセリフでリンダに伝えているのは、夫デイヴィッドが不義をはたらいていたということ、相手が女であり、素人ではなく、プロであるということ、その事実がリンダの推測通りだったということである。読者であるわれわれは、ミリセントの伝える事実が重要な部分において真実に合致していないことを知っている。ミリセントはリンダに事実を正確に伝えないことによって、つまり、この場合は、おぞましい真実をそれほどおぞましくない虚偽に代えることによって、何も知らないリンダが真実を知ったら受けるだろう衝撃を和らげよう、あるいは世間体を鑑み醜聞を回避するためにその場を取り繕おうとしただけなのだろうか。ただ当のリンダは、いくつかの指標が示すように、ミリセントに先立ってことの真相を知っていた、というのでなければ、少なくとも察知していた。そして、ミリセントは「すべてを理解した」とあるが、そこにはリンダが真相を知っている、あるいは察しているという事実も含まれるであろう。その場合、ミリセントの嘘は、デイヴィッドの相手が自分の予想通り男であればショックを受けるはずであるリンダへの気遣いから吐いた嘘——不倫はしていたけれど相手は女だった＝あなたの兄ではなかった——だということになるだろう。しかし、ずっと前からデイヴィッドと自分の兄の関係を知っていたリンダが、その場でとっさに思いついたような嘘に騙されるだろうか。そうとは思えない。だとすれば、むしろ、ミリセントは自分が伝える虚偽が虚偽としてリンダによって受け取られることを承知の上で嘘を吐いているとも考えられる。その場合、ミリセントが発するメッセージは、自分自身の素朴さ、愚かさに向けたアイロニー、リンダとの暗黙の了解を含蓄する一種の目配せとして機能していることになる。つまり、ミリセントが伝えようとしたのは、「私もうぶね、すっかり騙されたわ。相手は男だった、あなたはそれを知っていたのね、その男があなたのお兄さんだということも。」ということである。そもそも、忘れ物が腕時計程度であれば真実らしくもあるが、これ見よがしに下着であったなどというのは、嘘にしても、あまりに見え透いてはいないだろうか。

ミリセントの言葉は、文字通りに、つまり、真相を知らないリンダを前に、その場を取り繕うために吐いた嘘、あるいは、真相を知っているリンダへの気遣いから吐いた嘘、つまり彼女の心痛を憂慮して吐いた嘘として理解

すべきなのか、あるいは反語的に、真実のいわば自己譚諷的報告と受け取るべきなのか。結局のところ、彼女が何を言おうとしたのかは不明である。尋ねたい気はするが、作品はここで終わっており、これに対する答えはない。その意味で読者は、作品が宙ぶらりんのまま終わってしまっているような印象を抱くが、これを語り手の不手際とみなすべきなのだろうか。あるいは、それもまた語り手が意図したことなのだろうか。実際、転じてみると、テキストは、最終的意味ないし意図を示さず、作品が宙吊り状態に置かれるような形をあえて採用しているようにも見える。「夫は同性愛者ないし両性愛者である」という答えは出てしまっているのに、まだ何か、言い足りないことがあるかのように振る舞っているようにも見える。テキストは答えの不在を介して別の展望に開かれているかのようだ。われわれはこれをあえて更なる解釈、別の解読への誘いと捉えてみたい。そう思う余地が客観的にもあるからだ。実際、複数あった謎（謎Ⅰから謎Ⅵまで）のコードをおさらいしてみると、われわれは L. 1 の分析において、ある謎を読み取っていたが、いの一番に見出されたその謎が孕んでいる問いを完全には閉じておらず、半ば開いたままにしておいたことに思い至るのである。

分析の冒頭、われわれは、タイトルの « L'inconnue » 「未知の女」が誰を指しているのか、そこにおいて誰が問題となっているのか、という問いを立てた。答えとしては、デイヴィッドの浮気の相手（それが女であれば）、ミリセント、リンダの三つの可能性がある。この物語の主たる興味がデイヴィッドの浮気相手探しにあるという点では、「未知の女」はデイヴィッドの浮気相手を指すと見るのが妥当であろう。第一義的には夫の浮気相手 (une autre femme 実際には un autre homme) を指しているタイトルは、その意味で、ミリセントの思い違い、あるいはむしろ思い込みを囿として掲げつつ、読者に罫を仕掛けているのである。

しかし本当にそうだろうか？あるいは、単にそれだけだろうか？そもそもタイトルが罫であり、そこに罫が仕掛けてあるなどというのは、ありうることだとしても、そしてまさにそこに面白味があるのだといかに主張してみたところで、いささか気取りが過ぎると取ることもできるし、それに、仮に正道という立場があったとして、そこから見たら邪道ではないか？実のとのこと、謎めいたところがあるという意味では、「未知の女」はリンダを指すと考えることも十分にできるのである。現に彼女の性格は「謎」として明示されており (L. 13)、その答え (原因) が随所で与えられている、あるいは少なくとも仄めかされている (L. 50, 63, 68)。テキストをある意味で素直に読めば、彼女こそが「未知の女」と呼ばれるのにふさわしい人物なのだ。

では、ミリセントはどうか？彼女も女性であるという

点では「未知の女」の候補に挙げることが十分にできる。それに謎のⅡは、その解明がほどなく、そして難なくなされるにしても、「彼女」= ミリセントに関わる謎であった。ただこの物語の中で彼女は最も「未知の女」と感じられない人物である。それは彼女がたまたま明るく、陽気で、率直な人物として描かれているからではない。より本質的に、物語の成り立ちからしてそうなのである。というのも、構造的に見て彼女は、この物語の語り手そのものではないが、語りがしばしば自由間接話法を援用し、彼女の視点からなされているという点で、この物語のまさに主観をなしているからだ。語る主観がみずからを解くべき謎ととらえる、あるいは答えるべき問いとして提示することはまれであるが、この物語の場合も例外ではない。だが、そのような印象ないし効果にもかかわらず、「未知の女」がミリセントを指す可能性がある以上、われわれ読者にはそのように理解して、つまり、彼女をめぐる謎Ⅵ—「ミリセントは何者か？」—を想定しながら、この作品を読む理由が十分にあるのである。そもそも、このテキストにおいて最初に浮上する謎、問いは、冒頭の一文(L.2)に記された「彼女」をめぐる謎であり、「それは誰なのか？」という問いではなかったか？然り、ミリセントは謎の女 (inconnue) として登場したのである。

まず、意味素のコードについてみると、ミリセントには、巧みな車の運転技術(L.2)やゴルフ愛好家らしく大股で歩く姿(L.10)を通して、〈男性性〉の意味素が付与される。象徴のコードの観点から見ると、リンダ(L)は(実際に女性であることは別に象徴的な意味で)受動的で陰性を帯びた女性的人物として描かれる(L.10-13)が、一方、ミリセント(M)はその分だけその能動性、陽性、男性性は際立つ形となり、その対立——L (*elle, lady, lesbienne...*) vs M (*man, mâle, homo...*)——が浮き彫りにされる⁹。行為論的には、ミリセントとリンダが土曜の夜を二人だけで過ごしたらいいこと、あるいは日曜の夜についてはその予定だったこと(L.12, 21)、事件当日(日曜)の夜は共に「寝る」ことにしたこと(L.62)がそれとなく記されている。最後に、参照のコードに類するものとして、文学や説話が媒介する名前の秘教的象徴主義を引き合いに出すならば、ミリセントは「メリザンド」として〈素性の知れない女〉および〈不義をはたらく女〉という属性を帯び、「メリュージュ」として〈半身半獣の怪物〉の規定を受ける(L.12参照)。

以上の指標から類推しうるのは、ミリセントが夫デイヴィッドと同じ同性愛者で(も)あるということだ。ミリセント(M)とリンダ(L)は、意味素のレベルで、

前者は〈男性性〉、後者は〈女性性〉の相の下、対照的に描かれる。しかし、まさにそれゆえにこそ両者は、象徴のレベルでは対立関係(L/M)にはない。両項を分離する斜線が脱落した連鎖関係 *enchaînement* (LM: *Elle aime ou Elle l'aime*)にあるのである。とすれば、彼女がこの事件を通して発見したのは、夫も自分と同じく同性愛者であると同時に同性愛者でもあったということになる。それは彼女にとって青天の霹靂ではあったかもしれないが、必ずしも悲しいだけの発見であったとは限らない。それこそ一文字通り？—悦ばしき知識 *Gay science* でさえあったかもしれない。その点、この発見の後にミリセントはリンダに対して「憐み」を抱いたとはあるが、彼女自身の心理ないし感情は語りから撤退し、示されることがないのは示唆的だ。同性愛という観点からすれば夫は不義をはたらいていなかったわけだし、同性愛という観点からは、自分も夫と同類であり、しかも自分のパートナーが兄のパートナーの妹だったのだから、ミリセントが抱いたのは、複雑な感情であったには違いないだろうが、まさにそれゆえにこそ単に否定的な感情ばかりではなかったであろう。

いずれにしてもミリセントは、夫の素性を知ったからといって、それがトラウマとなるほどの心理的衝撃を受けた様子はない。テキストに書いてあるのは「憐れみ」を感じたということだけだが、彼女が憐れみを感じたのはリンダに対してであって、自分に対してではない。トラウマと言え、リンダがその影響を蒙った節がある。彼女は、兄とデイヴィッドの関係を知ったことで受けた衝撃を言語化しえず、内面化し、トラウマとして抱え込んでいる。その影響が「無気力」(L.13)として身体に刻印され、ヒステリックに表現されている。また、その防衛的解決策が同性愛から同性愛への撤退ないし退行なのだ。同じ同性愛でもミリセントの場合は位相が異なっている。彼女は、リンダのように、男を愛せなくなった女ではない。実際彼女は、リンダのように体験をトラウマ化する(非言語化、内面化)のではなく、ユーモアないしアイロニーによって言語化し、対象化しているのではないか。彼女は反動形成によって同性愛者となったのではない。同性愛を異性愛と共に享受していたのである(そしてこれからも享受し続けるだろう)。

REF. 文学史：サガン伝説

本稿を締め括るにあたって、最後に、いわゆる作品と作者の関係について、一言触れておきたいことがある。

ミリセントが両性愛者であるという解釈は、あくまでテキストに散りばめられた指標から導き出されたもので

⁹ LとMは、調音上の舌(歯茎音)と唇(両唇音)の対比を基に、音韻論的対比をなしており、そこから派生して象徴的対立(その内容は様々だ)を形成することができる。例えば、TVドラマ「L et M わたしがあなたを愛する理由、そのほかの物語」では同一の俳優が二人の対照的なヒロイン「絵瑠」と「絵夢」を演じているが、そこでは前者が男性的女性の役を、後者が女性的女性の役を割り振られている。ただここでは、ことはまさに性格に関わる意味素のレベルにとどまっており、性的同一性に関わる象徴の深みに達してはいない。

ある。作者フランソワーズ・サガンが現実にもそうであった(らしい)ことと直接には関係がない。われわれは、素朴にも作者と作品は反映、表象、模倣の関係にあると考えるような考え方に与してはいない。しかしながら、だからといって両者が截然と分離しうるものだとも考えない(ある意味では、分離できると考えること自体がテキストに作品と作者の表象=代理関係を再導入することにつながりかねないとさえ考える)。われわれはむしろ、同じ一つのテキストが作者と作品を共に貫いているという見方を採りたい。作品を産出し構成する過程と、作者の生を産出し構成する過程とが相通じ、書誌的要素と伝記的要素が交じり合う領域があるということだ。われわれが準拠している『S/Z』の著者ロラン・バルトが『サド、フーリエ、ロヨラ』で「伝記素」(« biographème »)と呼ぶところのもの領域である¹⁰。それはなまの事象ではなく、あくまで書かれたもの(*graphie*)、従って読まれるべきもの(*légende*)の領域である。その意味でわれわれは、サガンの伝記を伝説として捉え直し、下世話なゴシップの集積物としてではなく、「ロマネスクな閃光の源¹¹」として読み返すことができるだろう。

そうした領域の中にさまざまな要素が見出されるが、フランソワーズ・サガンの場合、その一つがまさに同性愛ないし両性愛という要素である。といっても、われわれが問題としたいのは、実体としての同性愛ないし両性愛ではない。両性愛といい同性愛といい、実体として社会習俗上のスキャンダルであるかもしれないが、それ自体はありきたりの事象であり、陳腐な話題¹²にすぎない。それに、彼女が同性愛者であったという単なる伝記的事実はテキストの中に表象の問題系を再び持ち込むことになるだけだ。われわれが魅惑され、われわれのより社会的でない興味、いわばより野生に近いレベルの関心を引くのは、ある目立たない地味な細部¹³に関わる伝説、ここでは、サガンが自分の同性愛を、恥じていたわけはいささかもなからうが、それに対して恥じらいを示し

ていたらしいという伝聞である。サガンの伝記作家ルーイーヴルはことを次のように伝えている。

パオラ・サンジュストとフランソワーズ・サガンが手をつないでいる写真は見つからなかった。ドーヴィルの〈オテル・ド・パリ〉の玄関で取られた写真は、二人とも同伴男性に手を預けている。フランソワーズをエスコートしているのはジャック・シャザー、パオラの手をとっているのは、ジャン＝ポール・フォール。彼女たちの関係が表面化することはなかった。サガンは女性が好きだった。だが、彼女は女性との関係を隠しつつ、表沙汰にすることはなかった。愛した女たち、誘惑した女たちと恋人同士のような姿を見せたことはない。パオラ、ジュリエット、ペギー・ロッシュ、エヴァ・ガードナー。意中の女性と一緒にのところに写真に撮られないよう、劇場やカジノへ行くときは必ず男性にエスコートさせた¹⁴。

同性愛を隠すわけではないが、ひけらかすのを拒むサガンの姿が印象的だ。この細部は映画「サガン¹⁵」でも何気なく取り上げられている。仲間の前でパオラ・サンジュストが二階の寝室でベッドを共にしていることを仄めかすと、フランソワーズはにわかにな機嫌になってしまう場面がそうだ¹⁶。サガンは同性愛を道徳的あるいは宗教的に「恥じる」ことはなかったが、それについて社交上あるいは儀礼上「恥じらう」ことは大いにあったようだ¹⁷。気質上、宗教的には無神論者、道徳的には懐疑派に属していたと思しき彼女には、ある種の性愛への罪悪感・罪の観念に由来する垂直的感情——*honte*——には縁がなかったものの、ある種の性愛への性向が他者の注目を集めることへの困惑・居心地の悪さ——に由来する表層的・社会的感情——*pudeur*——は大いに持ち合わせていたようだ。こうした性格的傾向——エートス——には微笑ましいものさえ感じるが、それが彼女の人生だけでなく、作品という装置の動力——*エクリチュール*

¹⁰ Roland Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, coll. « Points », Seuil, 1971, p. 14.

¹¹ « L'auteur qui vient de son texte et va dans notre vie n'a pas d'unité ; il est un simple pluriel de "charmes" 『S/Z』の著者ロラン・バルトが、le lieu de quelques détails ténus, source cependant de vives lueurs romanesques, un champ discontinu d'amabilités, en quoi néanmoins nous lisons la mort plus sûrement que dans l'épopée d'un destin ; ce n'est pas une personne (civile, morale), c'est un corps » (*ibid.*, p.13).

¹² 『明るい部屋』のバルトなら「ストゥディウム」(« studium »)と呼んだであろう文化的関心事。

¹³ 前注の伝で言えば、「プンクトゥム」(« punctum »)。

¹⁴ Marie-Dominique Lelièvre, *Sagan à toute allure*, Denoël, 2008, pp. 141-141 (永田千奈訳『サガン 疾走する生』阪急コミュニケーションズ、2009、147-148頁による)。

¹⁵ *Sagan*, 2008 (邦題「サガン—悲しみよこんにちは—」)。

¹⁶ ちなみに、この映画ではペギー・ロッシュとサガンの関係もそれと命名されることはなく、暗号化されている(他愛ない暗号ではあるが)。ホテル・リュテシアで久しぶりに再会した二人は、再会を祝し、ホテルのバーで数本のシャンパーニュを空けた末、同じホテルの最高級の部屋に泊まることにする…。しかるに、そもそも二人の再会がなったのは、先にホテルを出ようとしていたペギー・ロッシュが、クロークに預けておいたコートを係りの従業員が探しあぐねていたため、その場に必要以上に留まっていたからである。従業員は引換證の番号6を9と読み違えていたのだ。

¹⁷ 恥 *honte* と恥じらい *pudeur* の関係は『悲しみよ こんにちは』の冒頭で語られる「後悔」(« regret »)と「良心の呵責」(« remords »)の关系到類するものように思われる(「悲しみ—それをわたしは身にしみて感じたことがなかった。ものうさ、後悔、ごくたまに良心の呵責、感じていたのはそんなものだけ。」河野万里子訳)。

——にも関わると仮定すれば、それをわれわれの分析のひとつの足掛かりとし、解釈の手掛かりとすることは、必ずしも間違いとは言えないし、われわれが取り上げたテキストにその痕跡が認められると指摘しても、それほどの外れではないであろう。

資料編

以下は本テキスト分析で解読された〈意味〉の一覧である。出現順に並べてあるだけで、コード毎にまとめるなど、特に手を加えていないのは、さほど長大なリストではないので、むしろこの方が必要に応じて分類したり整理したりして、いかようにも利用できるものと思われたからである。ちなみに、その個数は、ACT. が69、HER. が68、REF. が38、SEM. が37、SYM. が35、合計247である（レクシの切り分け方により一つの項目が複数の単位を持つ場合がある——特にACT. の場合——ので実数はこれより多い）。これらの数字、あるいはむしろその比率は、恣意的という以上に偶然によるところが大であるが、まったく無意味というわけでもないだろう。主観的には分析者の力量や性向・嗜好を表しているかもしれない、客観的には分析されたテキストのジャンルやタイプ、質・特徴に対応しているかもしれない。本稿に類する試みが現にどれだけなされているか不明だが、一定の数の資料が得られた暁には、興味深い統計分析ができるかもしれない。

- (1)
HER. 謎Ⅰ：1：提示（「未知の女」とは誰か？）
HER. 謎Ⅰ：2：部分的解答：女性
SYM. 対立：A/B：B=女性
SYM. 中性：AB、ないし非A非B
- (2)
HER. 謎Ⅱ：1：提示（「彼女」とは誰か？）
ACT. 帰宅：1：到着
SEM. 富裕
SEM. 男性性、男まさり
SYM. A/B：A=男性
- (3)
ACT. 帰宅：2：帰宅の告知
ACT. 内省：1：事実認定
HER. 謎Ⅲ：1：予知・予感（夫に何があったのか？）
- (4)
SEM. イギリス性
REF. 人名の地誌学
REF. 名前の象徴学：聖書：ダヴィデにまつわる物語
SEM. 美男、男色
SYM. A/B→AB（A=男性、B=女性）
- (5)
ACT. 内省：2：自問
SEM. 事件発生の子感
- (6)
REF. 夫婦の生態学
SEM. 安定安全／危機危険
SYM. A・B：対立項の共存、両義性
REF. イギリスの地誌：レディング
SEM. 富裕、社会階級
- (7)
SEM. 善良さ
SYM. A/B：A=善
SYM. A/B：A=男性
- (8)
ACT. 帰宅：3：応答なし（=夫の不在）
HER. 謎Ⅲ：2：謎の定式化（夫に何があったのか？）
ACT. 独白：自問
- (9)
ACT. 帰宅：4：家に向かう
SEM. 富裕、男まさり
SYM. A/B：A=男性
- (10)
SEM. イギリス性、女性性
SYM. A/B：B=女性
- (11)
SYM. 男の不在、男／女のパラダイムの失効、去勢
SYM. 中間：非A非B（A=若さ、B=老い）
- (12)
HER. 謎Ⅱ：2：解明
REF. 名前の系譜
REF. 文学：不義
REF. 伝承・説話：怪物
REF. 名前の秘教的・神秘主義的象徴学

(13)

REF. 語源、名前の象徴学
HER. 謎Ⅳ：1：提示（リンダは何者か？）
ACT. 内省：3：リンダをめぐる疑問

(14)

HER. 謎Ⅳ：2：解明の試み：1：否定的見解
HER. 謎Ⅴ：1：暗示（デイヴィッドは何者か？）
SEM. 皮肉屋、冷笑家
SYM. A/B：B=邪悪
SEM. 二重人格、偽善者
SYM. AB=二重性
HER. 謎Ⅴ：2：答えの暗示

(15)

HER. 謎Ⅳ：3：解明の試み：2：肯定的見解
SYM. 白/黒
SEM. 幼児

(16)

HER. 謎Ⅴ：3：漸進的解明

(17)

SEM. 女嫌い、人間嫌い=男嫌い、同性愛
HER. 謎Ⅴ：4：漸進的解明
SYM. 黒/白
REF. 辞書（固有名の普通名詞としての意味）；人名の地誌学
SEM. 率直さ；イギリス性

(18)

REF. 文学死：機知に富む作家（バーナード・ショー、オスカー・ワイル）
HER. 謎Ⅴ：5：暗号化された答え

(19)

ACT. 帰宅：5：戸を開ける、入り口で立ち止まる
HER. 謎Ⅲ：3：答えの予示と宙吊り=サスペンス
SYM. 非A非B：A=外（日常）、B=内（事件）：中間

(20)

SEM. 乱痴気騒ぎ、派手なパーティ
SEM. 不貞
HER. 謎Ⅲ：4：答え：不貞

(21)

HER. 謎Ⅲ：5：謎解きの回避、解答の延期：サスペンス
ACT. 帰宅：6：繰り上げられた予定日
ACT. 内省：4：後悔

(22)

HER. 謎Ⅲ：6：サスペンスの解除：謎解きの続行
HER. 謎Ⅲ：7：謎解きの回避：サスペンスの維持
HER. 謎Ⅲ：8：真相への婉曲な言及
ACT. 内省：5：自問する

(23)

HER. 謎Ⅴ：6：謎の深化
SYM. A/B：A=外、自然、B=内、人為
REF. 夫婦の生態学

(24)

ACT. 対話：1：問いかける
HER. 謎Ⅲ：9：謎解き：部分的解：パーティ

(25)

ACT. 笑い1：1：笑う
ACT. 内省：6：推論する1（L. 27まで）
HER. 謎Ⅲ：10：楽観的推理；謎の否認
REF. イギリスの地理：リヴァプール
SEM. 仕事、ビジネス
REF. イギリスの習俗
SEM. 富裕；男性性
SYM. A/B：A=男性

(26)

HER. 謎Ⅲ：11：推理：可能でありかつ妥当な解釈
ACT. 驚き：1：驚く

(27)

REF. 西洋における好男子の類型
HER. 謎Ⅴ：7：推論：それと意識されない正解

(28)

ACT. 後片づけ：1：片づける
HER. 謎Ⅲ：12：可能でありかつ妥当な解釈：不義
SEM. 事態の暴力性

(29)

ACT. 座る：1：促す
ACT. 応接：1：提案する
ACT. 対話：2：語りかける
HER. 謎Ⅲ：13：真相究明の中断、延期：サスペンス
SEM. イギリス性

(30)

ACT. 座る：2：座る
SEM. 不安
HER. 謎Ⅳ：4：指標：リンダは何者か？

(31)

ACT. 対話：2：応答する
 ACT. 応接：2：要望する；3：要望に応える
 REF. イギリスの習俗
 SEM. イギリス性
 SYM. A/B：A=冷、B=熱

(32)

SEM. 奇矯さ
 SYM. A/B：A=内、自然らしさ、健全、B=外、不自然、不健全
 HER. 謎Ⅴ：8：指標：デイヴィッドは何者か？
 REF. 習俗：イギリスのブルジョワ家庭

(33)

SYM. A/B：A=内、安全、B=外、危険
 ACT. 帰宅：7：予定を繰り上げて帰宅した理由

(34)

ACT. 対話：4：断言する；5：肯定する
 HER. 謎Ⅲ：14：推理：既定事実の提示
 ACT. 視る：1：見回す

(35)

REF. 動物寓意譚
 SYM. A/B：A=獯猛、B=柔和

(36)

ACT. 応接：4：飲み物を飲む
 ACT. 視る：2：正視する
 REF. 振る舞いの記号学

(37)

ACT. 内省：7：推理2
 HER. 謎Ⅲ：15：推理：論理的帰結：情事
 HER. 謎Ⅲ：提示：不義の相手は誰か？
 HER. 謎Ⅲ：推理：部分的答え：相手はリンダではない

(38)

ACT. 帰宅：8：帰宅前の行動
 HER. 謎Ⅳ：5：提示：リンダはなぜミリセントより怯えているのか？

(39)

HER. 謎Ⅴ：9：謎の知覚：デイヴィッドが女性に関心を示さないのはなぜか？
 SYM. A/B：A=男、B=女

(40)

REF. 夫婦の生態学
 HER. 謎Ⅴ：10：否認の試みと挫折：サスペンス

(41)

ACT. 対話：6：質問する；7：応答する
 HER. 謎Ⅲ：16：解明の試み：修辭的二者択一
 SEM. 富裕

(42)

ATC. 笑い2：1：笑い始める
 ACT. 内省：8：問題の一自己欺瞞的一整理
 HER. 謎Ⅲ：17：謎を無害化する偽りの解：ノーマルな情事
 REF. 情事のコード、コードとしての情事

(43)

ACT. 笑い2：2：反応する
 ACT. 対話：8：反論する
 HER. 謎Ⅲ：18：推理：想定された答えの排除
 HER. 謎Ⅳ：6：リンダはなぜ確信をもつて的確に反論できるのか？

(44)

ACT. 笑い2：3：より一層笑う
 ACT. 対話：9：再び応答する
 HER. 謎Ⅲ：19：「相手は誰か？」；解明の試み：偽りの答え
 SEM. イギリス性

(45)

ACT. 対話：10：再反論する
 ACT. 座る：3：立ち上がる仕草をする
 HER. 謎Ⅲ：20：解明の試み：提示された答えの棄却
 ACT. 退去：1：腰を上げる
 HER. 謎Ⅳ：7：リンダは何者か？

(46)

ACT. 対話：11：説得する
 HER. 謎Ⅲ：21：推論：部分的答えの提示
 REF. 夫婦の生態学

(47)

ACT. 対話：12：承服しない
 HER. 謎Ⅳ：8：リンダの不可解な態度
 REF. イギリスの地理：ロンドン

(48)

ACT. 対話：13：詰問する

HER. 謎Ⅳ：9：解明の試み

(49)

HER. 謎Ⅳ：10：リンダの奇異な反応
REF. 浪漫派的恋愛

(50)

ACT. 対話：14：答える
HER. 謎 5：答え：幼馴染
SEM. 幼児性
REF. イギリスの学制
SEM. 富裕
HER. 謎Ⅴ：11：真相の在り処

(51)

ACT. 対話：15：提案
HER. 謎Ⅲ：22：不完全な答え：不倫
ACT. 退去：2：留まる
REF. ロンドンの交通事情

(52)

ACT. 応接：5：飲み物を注ぐ
REF. アルコールをめぐる行動心理学
HER. 謎Ⅳ：11：謎の知覚

(53)

ACT. 対話：16：確認する；17：同意する
ACT. 内省：9：デイヴィッドの本性を照らし出す回想
REF. レトリック：暗示的看過法 (préterition)
HER. 謎Ⅴ：12：答えの諸要素
SEM. 二重人格者
SEM. 神経症
SYM. 世界の二重化

(54)

HER. 謎Ⅲ：23：部分的答え：不倫
REF. 女性の類型学

(55)

ACT. 対話：18：尋ねる
ACT. 内省：10：謎Ⅲをめぐる推理
SYM. AB：A=自己、B=他者：自己疎外
REF. 文学：ファニー・ハーストの小説『裏町』
SYM. A/B：S/M：嗜虐/被虐：能動/受動
SEM. 性愛の倒錯性・暴力性

(56)

ACT. 対話：19：答える；20：是認する
HER. 謎Ⅲ：24：推理：仮説の棄却

REF. 女性の生態学・類型学、情事に関する常識

(57)

ACT. 自分の姿を見る：1：立ち上がる；2：移動する；
3：鏡を見る
SYM. 鏡像：自己の二重化
REF. 理想のカップル像

(58)

ACT. 対話：21：謎Ⅴをめぐる疑問点を挙げる
SYM. A/B：A=男性、B=女性
HER. 謎Ⅴ：13：謎の提示
HER. 謎Ⅴ：14：正解へのヒント

(59)

ACT. 対話：22：否認する
HER. 謎Ⅴ：15：真実の否認：サスペンス
SYM. 非A非B：A=明、B=暗：中間

(60)

ACT. 内省：11：謎Ⅳをめぐる疑問点を挙げる
HER. 謎Ⅳ：12：疑問の深化
HER. 謎Ⅲ：25：解明の引き伸ばし、サスペンス
SEM. 神経症

(61)

ACT. 内省：12：覚悟を決め方針を立てる
REF. 浮気の滑稽芝居
SEM. イギリス性、男性性、任意性
SYM. A/B：A=男性、B=女性

(62)

ACT. 実況見分：1：立ち上がる；2：埃を払う；3：
宣言する
ACT. 対話：23：宣言する；24：同意する
ACT. 退去：3：断念する
REF. 振る舞いの記号学
SYM. A/B：A=外(表)、B=内(裏)。
REF. 処世術としてのユーモア

(63)

ACT. 実況見分：4：移動する
ACT. 微笑む
ACT. 内省：13：自問自答する
SYM. A/B：A=実像、B=虚像
SYM. 象徴の本性：反復回帰
HER. 謎Ⅲ：26：真実のヒント

(64)

ACT. 驚く

ACT. 腰を抜かす

ACT. 内省：14：既定方針を維持する

REF. 情事をめぐる格率への依拠

HER. 謎Ⅲ：27：偽の答え——ノーマルな不倫——の維持

(65)

ACT. 実況見分：5：現場に到着する；6：実施する—
L. 66に続く

SEM. 瀆聖

SEM. 性愛の暴力性

HER. 謎Ⅲ：28：偽の答えの維持・強化

(66)

SEM. 男性性

HER. 謎Ⅲ：29：推理：全面的解明

HER. 謎Ⅴ：16：推理：全面的解明

SYM. 対立の解除：AB

HER. 謎Ⅵ：1：浮上：ミリセントは何者か？

(67)

REF. 省略法（エリプス）：ミリセントの感情描写の修
辞学的欠落

(68)

ACT. 実況見分：6：帰着する

HER. 謎Ⅳ：13：解明

(69)

ACT. 実況見分：7：報告する

ACT. 対話：25：報告する

HER. 謎Ⅲ：30：虚偽の報告

HER. 謎Ⅵ：2：再浮上：なぜミリセントはうその報告
をするのか？

SEM. 派手なサーモンピンクの下着：女：プロ

SYM. A/B：A=男、B=女

REF. 情婦の類型：素人／プロ

(69^{bis})

HER. 謎Ⅵ：3：解明

REF. 文学史：両性愛の作家列伝（フランソワーズ・サ
ガン）